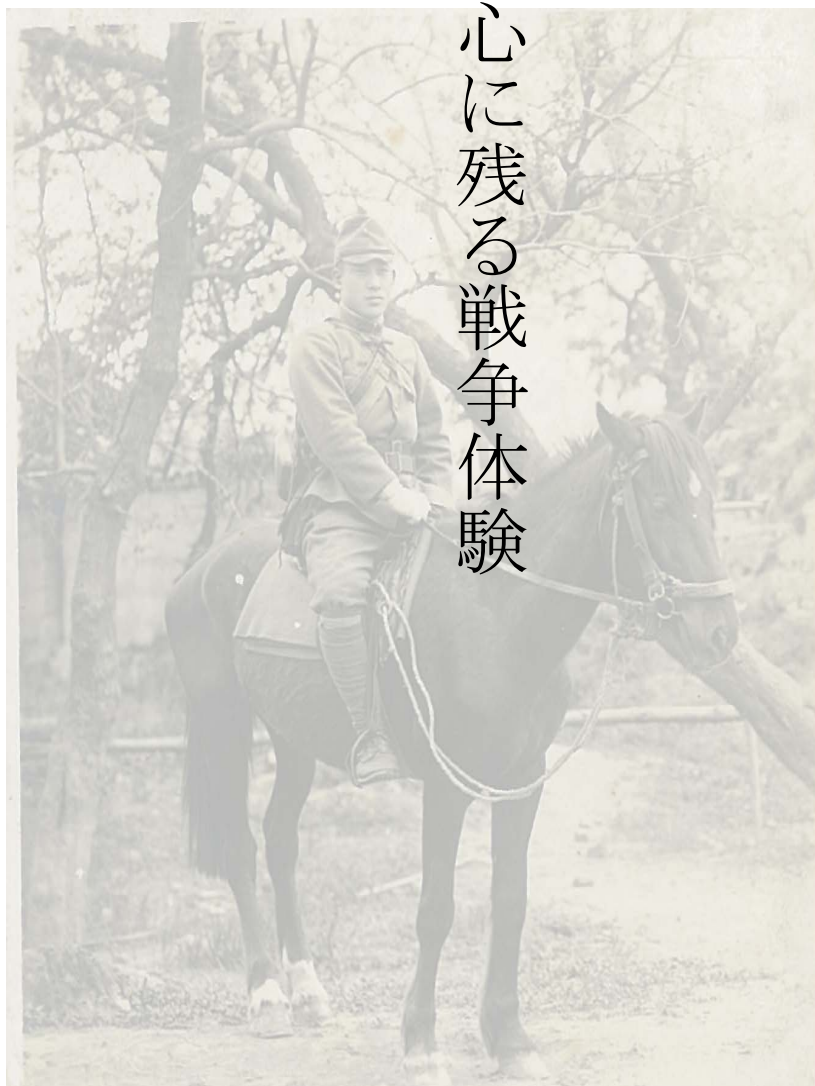


第二部 市民の心に残る戦争体験



中国戦線にて（提供 渡邊とし子氏）

十二 戦中・戦後の思い出

吉祥寺北町

生方うぶかた

ゆき子こ

生まれは、三田で、昔は同朋町といいました。5歳から結婚するまでは、昔は大森区と言いましたが、大森区の馬込におりました。昔は今のJRのことを省線電車と言っていました。交通機関は鉄道しかなく、バスも走っていませんでした。駅まで20分ぐらい歩くのは常識でした。山側の家でしたので、戦災で焼け残ったからのことですが、小山へ立ちますと海岸のほうまで見えました。

空襲について

空襲があった夜は、3回ぐらい空襲警報のサイレンが鳴りました。寝巻を着て寝ていたのでは、とても着がえて防空壕まで行くだけの時間がありません。空襲警報が鳴ったときには、B 29は、すぐ上へ来ていました。だから、いつも寝るときは、上着も全部着て、防空頭巾だけ枕元に置いて、すぐ飛び出せるような態勢でした。安眠などとてもできません。よく父が、「神経戦だなあ」って言っていました。こういう日が続くと、朝起きると疲れが抜けず、くたくたにくたびれて、やる気をなくしています。

よく「悪運強いな」なんてその当時の同僚から冷やかされていましたが、家は焼けることはありませんでした。空襲で海岸沿いの建物は、全部やられました。軍需工場の町工場がいっぱいあったので、空襲の標的となったようです。

空襲があると防空壕に逃げ込みましたが、ただ穴を掘ってあるだけのものなので、爆風を避けるためだけのものです。だから、飛行機からは丸見えです。道路はコンクリートがあり、穴が掘れないので、街路樹のあっちこっちに防空壕が掘ってありました。

食糧事情について

戦時中、食糧事情がだんだん悪くなった影響で、父が、ちょうど戦争の真っ最中の昭和20年に病死しました。病気になっても、医者が軍隊に取られて周りにいなく、薬もありません。だから病気になる、薬がないうえに、慢性的な栄養失調で体力がないから、60代の方はちよつと風邪にかかるだけで、肺炎を起こして死んでしまいます。毎日が極限状態です。

私はまだ娘で、台所のほうは母がやっていましたので、直接は分かりませんが、お米が無くて会社へお弁当を持っていきません。そこで、四方八方駆けずりまわって大豆や

お米をかき集めました。豆を入れて弁当の量を増やします。そうしないと弁当の半分も埋まりません。次第に米の配給が無くなり、大豆の配給になると、大豆を煮るか炒るかして、日にそれを2回も食べます。毎日毎日これが続くと、いやになっちゃうし、おなかも壊しました。食べなければ治りませんが、他に食べるものがないから、食べないわけにはいかないのです。おなかを壊しながら、薬を飲んで食べていました。

お茶わんに半分のご飯をもらうより、母親が大根の葉を刻んでご飯に入れて、見た目が茶碗いっぱいある方が良かったです。これだけいっぱいあるなと思えるから、目だけである程度おながいっぱいになったのです。

武蔵野市に来たのは、結婚してからなので、昭和24年11月ですが、まだその頃は、食糧事情は余りよくなかったです。

お米とパンは配給制で切符によってもらっており、米穀通帳（米穀配給通帳）というものがありました。今のようにおいしくないパンでしたが、口へ入れればよかったです。

でも、配給されるものだけ食べていたら、それこそ栄養失調で死んでしまいます。だから、闇米（やみごめ）を買うのが普通でした。闇米がなかったら、私たちも恐らく食

糧難で生きていなかったでしょう。でも値段が高くて大変でした。米穀通帳は、昭和30年頃まで使っていました。結婚するときも、住民票のように米穀通帳でこつちを消してこつちへ移すということでした。

闇米は、ご近所の顔見知りの方の実家が川越と所沢で農業を営んでいて、その実家からお米を持ってきて分けてくれました。

農家に直接買いに行く場合は、着物を持っていきました。若い人の着物が特に喜ばれるのでそれを持って行きます。

リュックを背負いもんぺをはいており、汚い格好をしていますから、買出しに来たことは誰が見ても、一目瞭然です。そのとき、農家の人が一番先に言う言葉が「みやげ、何持ってきた？」なんです。今から考えると完全に見透かされていました。私の父はサラリーマンでしたので、呉服屋さんみたいな商売をしている人はいろいろストックがあつたでしょうけど、私たちには何にもありませんでした。「何にもない」と答えると、「どこそこのだれは何持ってきた」と言います。だから「タケノコ生活」と呼んでいました。着ているものをその場で、タケノコみたいに一枚一枚はがして行って、最後は芯だけになる。着物は、一遍で持っていきませんから、この次は、この着物を持っていくとか、この羽織を持っていくとか。もちろん、着物の

ほかにお金も持っていくわけです。

戦後、ある大学の先生が、自分は闇米は絶対に食べず、正々堂々と法律を守り、配給だけで食べていくことを主張し、餓死したという新聞記事が出ていました。他に裁判官で、亡くなった方がいたのを覚えています。

米兵について

日本の男の人の前で言うのは悪いのですが、日本の男の人は、特に戦争中は威張っていました。反対に戦後に出会ったアメリカの人は親切でした。

品川駅で、またいで歩けないくらい通路にいっぱい水が溜まっていたことがあり、通れないで困っていると、突然、体がすうっと浮き上がりました。びっくりしていたら、アメリカ兵が、背中を持って、自分はひざまでザブザブと水の中に入って、私を水のないところまで連れて行ってくれました。私を置いて、それでにこにこつと笑って立ち去ったのです。こっちは茫然としました。アメリカ兵は、女性にはやさしかったです。

電車の中でも、アメリカ兵が乗っていると、ピストルを持っていたので怖かったです。何かされるのではないかと思っていました。そんなことはありませんでした。アメリカ兵は、統制がとれていたのでしょう。絶対、素人の女

の人には手を出さなかったです。

あと、チヨコレートなんか憧れのまどでした。でもチヨコレートをくれる方もいたけど、私は、もらわないで逃げていました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

十三 技術部兵として

境

おののだ
大野田 武
たけし

私は、小倉陸軍造兵廠で高射機関砲の結合とその機関砲を、遠賀川河口に近い芦屋海岸から玄海灘に向って実弾射撃をして機能の確認をする作業や、千葉県君津に近い青堀海岸で、日立製作所製の同型機関砲の試射、検収等を行っていた。昭和十八年九月、小倉で造られた機関砲の砲身が動かなくなったので、これを修理操作中に、平均棒によって弾き飛ばされ、前額部を打ち割り、直ちに廠内の病院に搬送されて応急措置のうえ、郊外の日明（ひあかり）脳病院に転送された。日が経つにつれて、大きく縫合した傷口は癒着したが、玄海灘の荒波の音が聞える等の幻聴が起り、医師の勧めで、私は郷里長野県に帰って療養していた。

そして、翌十九年の徴兵検査で「第三乙種」となり、金沢の東部第四十九部隊に入隊したのである。

金沢では、第三次技術部短期教育兵として大阪教育隊に派遣されることになったが、これは兵器の基礎教育からやっついては、到底時局の要請には間に合わないもので、現役兵の中の技術者を集め、三か月の特訓教育で第一線

部隊に送り出すものであった。金沢は空襲もなく、近海ものの魚も潤沢で、食事も割合恵まれていた。七尾出身の青木軍曹は「お前ら俺の息子と同年だ」等と言ってかわいがってくれ、ここで五十日ほど兵としての基礎訓練を受けた後、大阪に出発した。

燈火管制下の大阪に着いたのは夜になってからであるが、途中、泣きながら半焼けの布団や鍋、釜等を持って避難して来る人の列を見て、大変なショックを受けた。戦意高揚ばかりのニュース映画や新聞等では見たこともない現実である。また、火だるまになって落ちて来る飛行機も、落ちて来るのは敵機だという先入感から、皆手を打って喜び合った。

薄暗い教育隊の食事は、ぼろぼろの高梁飯（こうりゃんめし）に玉葱を採った後の茎の塩汁、金沢とのあまりの違いに言葉もなかった。

大阪教育隊の隊舎は城東区関目にあつたが、教育は主として大阪城に近い大阪陸軍造兵廠の兵器製造現場で行われた。空襲警報も鳴らないのに、突然、屋根を貫く機銃掃射を受けたり、音もなく降って来る焼夷弾を夢中で濡れモップで叩き消したり、その直撃で即死した同僚の英霊当番で傷口にピョンピョン飛びはねる蛆虫（うじむし）を見たり、様々なことがあつた。

その頃、注目されたのが、最新鋭の高射砲である。これまでの高射砲弾は、高度七、八千メートルしか届かず、一万メートル位を来襲するB 29には対応できなかった。しかし、新鋭高射砲弾は高度一万メートルを超え、炸裂すると半径五十メートル四方に弾丸が飛び散るクラスター爆弾のようなもので、日本には二門だけだというその試作品（焼入れ前）を囲んで説明を受け、皆、これさえ出来ればと大いに士気を高めた。しかし、B 29を主体とする戦爆連合の大編隊の空襲は街を焼き尽くし、造兵廠も天地をひっくり返すような甚大な被害を受けて、心頼みの新鋭高射砲も遂に日の目を見ることはなかった。

（八月十四日の大空襲の一端は、前回の「戦争体験記」に記載）

○空覆い圧（お）し来る艦載機B 29見つつか寒さは背筋を走る

○焼き尽し燃ゆるものなき街行くに背（せな）に火は着く空気熱しみて

○四人みな征かしめし父「時々ハ便り呉レ給へ」と書いて来ぬはや

○弾けたる花火のごとく降りて来る焼夷弾赤々と夜空を染めて

○夜もすがら空を焦して焼きつくす炎は夜明け西に移れり

敗戦後、営庭に集められた我われは、教育隊の幹部か

ら「男は皆去勢され、奴隸としてどこかへ連れて行かれる。女はアメリカ兵が連れ去るので、私物は一切処分せよ」と言われたが、これは幹部等が経験して来たことの裏返しではなかったか。しかし、その為か自決、脱走が相つぎ、中には将校服を盗着し、佩刀（*1）して十余名を率い、営門から堂々と脱走する者さえあった。

金沢の原隊に復帰してから二十日ばかり、兵舎を大正時代の姿に戻すための取壊しや、多量の資材の焼却等の作業に従事した後、九月中旬、富山を焼き尽したおびただしい焼夷弾の殻を見ながら郷里に向った。

○小さくなり還り来しよと秋の蚕（こ）を桑づけぬたる母驚けり

なお、私の前額部の傷は、七十年経った今も消えることはない。

*1 佩刀（はいとう）

刀を腰におびること。また、その刀。帯刀。

※筆者は故人で、本文の掲載については、ご遺族の方に承諾をいただいています。

十四 私の戦争体験談

八幡町 後藤 シツヨ

昭和十六年十二月八日太平洋戦争勃発、日中戦争の最中でありました。当時二十三歳の私は、結婚の相手は雪の降らない所の人で農家はいやだと思っていました。その後、縁あって昭和十八年四月に東京に住む人と一緒になり、昭和十九年六月に女の子が生まれました。当時新聞も見る事も出来ずラジオで戦況を知りました。昭和十八年頃まではラジオでは進軍、進軍と放送されました。昭和十九年の一月頃のことでした。当時、国防婦人会という、戦争に出征する兵士をお見送りしたり、銃後の守り（*1）を堅くする団体がありました。その婦人会の幹部の方が「ラジオで放送されてくるニュースと異なり、ニューギニアの日本兵は全滅よ。」と、こっそりささやいて教えてくれました。

我が家は品川の荏原区にある二軒長屋の一軒で、三帖・四帖半・六帖の家に親子七人で住んでいました。近くの百米ートル位離れた所に旧皇族の御屋敷があり、空襲でその空地に爆弾が落ちたということ、家に防空壕を掘らなければと、家の中の畳をはがしてささやかな防空壕を作りました。

そして、度々の空襲のサイレンが鳴る度に乳呑み子をおんぶして防空壕へかくれたり出たりの毎日でした。戦争がはげしくなり硫黄島までも敵軍が北上したとニュースで聞いた時、もう日本はだめだ、と思わず叫んだ時に義弟に「シー、姉さん、そんな事を口ばしすると警察に連行されるよ。」といましめられました。

それから間もなく三月十日の夜、浅草下町の大空襲で大空の半分ほどが真っ赤に染っていました。

だんだんひどくなる戦況の為、私は子供を背負って、雪国の生まれ故郷の実家へ疎開しました。三月末なのに屋根の高さと同じくらい雪が積り、家の中へ入るのは雪の階段を降りて入ったほどです。疎開先でも、だんだん食物が逼迫（ひっぱく）して義姉は冬中の食料として保存して置いた長ねぎの枯れて黄色くなった葉までもつたいないと大きな鉄鍋でオジヤを煮てくれました。その時は本当に感極まりました。

沖縄では、米軍が遂に四月に嘉手納海岸に上陸し、戦況が激しくなる中で、ひめゆり学徒隊が結成され、陸軍病院へ動員されました。多くは命を落しました。戦後、多大なる功績をたたえた立派なひめゆりの塔が立てられました。私は十年前、沖縄旅行に行ったときに黙祷を捧げて参りました。そして八月九日、ソ連が宣戦布告し

て来ました。日本は敵軍の前に降参する事になり、八月十五日に天皇陛下の玉音を拝して戦争は終結しました。

* 1 銃後の守り（じゅうごのまもり）

軍隊などで直接戦闘に参加したり、戦闘部隊を支援する輸送部隊に参加するのではなく、それら軍隊が消費する資源・物資の供給を支えることによって戦争の遂行と勝利を支援するという考え方。戦場の後方であるため「銃後」と表現した。

十五 陸軍特別幹部候補生を志願して

境南町 邊見 憲二
へんみ けんじ

私は昭和二十年六月十日、陸軍船舶特別幹部候補生（四期生）として、香川県小豆島淵崎村（現土庄町）の陸軍若潮部隊に入隊した。入隊時の年齢は十五歳の少年でした。なぜ私は自ら志願して軍人になったのか、その時は自分でもよく理解することができず多少の不安もあったと思う。その一端として、一般的に冗談としてよく唄われていた或る軍歌の一節に「人の嫌がる軍隊に志願ででてくる馬鹿もある」というくだりがあり、私の頭のどこかに残っていたことも一つの原因であったのかもしれない。

実は、陸軍特別幹部候補生という制度は、今までは実在せず、昭和十八年十二月十四日陸軍現役下士官補充及び服役臨時特例という法律により新設された制度であった。この法律に基いて、昭和十九年四月に特別幹部候補生一期生が、続いて同年九月に二期生が、また、昭和二十年二月に三期生が、そして同年六月に我々四期生が入隊した。特別幹部候補生の年齢は前述の法律により満十五歳以上二十歳未満の者で、兵科は飛行と船舶の二兵科について募集がおこなわれた。

これらはすべて志願によるものとなっていた。学力はおおむね中等学校三学年程度の学力の者を対象とし、学科試験・身体検査および口頭試問をもって選抜された。

採用された候補生は、軍隊において基本教育をおこない、特に実践的な訓練に重点を置き、おおむね一年六ヶ月で現役下士官に任ずるというものであった。

私達船舶兵科に採用された候補生は、集合教育の目的をもって、小豆島の陸軍若潮部隊（陸軍船舶特別幹部候補生隊）に入隊した。私達教育部隊の特色は、陸軍の諸学校に準ずるもので、中隊編成（候補生隊七つの中隊）を基本とし、中隊の下部組織に区隊（五つの区隊）をもって構成されていた。若潮部隊の総員は約二千百名で、各中隊は三百名ずつに分れていた。中隊の下には各区隊が五つあり、一区隊の人員は六十名となっていた。

- 一誠隊（いつせいたい・一中隊） 一区隊から五区隊
- 不撓隊（ふとうたい・二中隊） 一区隊から五区隊
- 御盾隊（みたてたい・三中隊） 一区隊から五区隊
- 振武隊（しんぶたい・四中隊） 一区隊から五区隊
- 股肱隊（ここうたい・五中隊） 一区隊から五区隊
- 武烈隊（ぶれつたい・六中隊） 一区隊から五区隊
- 七生隊（しちせいいたい・七中隊） 一区隊から五区隊

以上七つの中隊で四期生は約二千百名であり、私は七生

隊五区隊に所属していた。入隊した候補生は、先ず、帝国陸軍としての心構えを体得する事であった。

候補生が中等学校の教練の授業時間において配属将校から学んだ基礎的な訓練の技能を、更に一段と向上し、これに加えて、船舶兵としての海上作業、特に舟艇操縦技能の修得に、もっとも力をそそいだのである。

緊迫した戦時態勢下との理由から、候補生隊の教育期間は、予定の一年六カ月から約四ヶ月と短縮された。教育内容は、年少の候補生ということで、軍隊内の日常生活にすみやかに親しむことを眼目とし、特に軍人勅諭（*1）を中心とした精神訓話、陸軍礼式令、刑法などの講義も加えられた。

また、実技にあたっては、候補生が海を知り、船（舟艇）に慣れることが、まず、第一であった。このために、舟艇の操縦法、手旗訓練、モールス通信、内燃機関、水泳などのほか、船舶兵として必須の基礎事項が学科と並行して実地教育として教え込まれた。

話は変わるが、基礎訓練中の或る日、先輩の三期生が小豆島の我が部隊に遊びにこられた、その先輩達から極秘に或る話を聞くことができた。話の内容は次のとおりである。我々の大先輩である一期生の大部分の人達が、海上挺進戦隊の隊員として転属され、水上特攻要員として、フィリピ

ン・台湾・沖縄の戦場に出撃し、千人以上が戦死したということであった。

念の為、海軍には「震洋（しんよう）」という水上特攻艇があるそうだが、我が陸軍にも四型肉迫攻撃艇（通称連絡艇、略称〇艇）という水上特攻艇があるようだが私達は入隊して間もない頃であったので、未だ実物を見たことはなかった。

何れにせよ、私達四期生も時期がくれば、先輩達と同様水上特攻要員とならざるを得ないものと考えようになった。

おそらく、大先輩一期生はこの〇艇に乗り太平洋の各戦場で戦い、戦死されたものと思われる。

そういえば我々四期生二百名の中で、昭和二十年七月に広島市の船舶通信補充隊に転属した百五十名がいた。同年八月六日市内の千田国民学校で朝礼点呼中の同期生に原子爆弾が落ち、二十数名が被爆して戦死してしまっただけである。

私達四期生は昭和二十年八月十五日の終戦日を迎え戦い半ばにして訓練期間未了のまま除隊となり止むを得ず、故郷に帰ったのである。

それから数十年の年が流れ、生き残った一期生から四期生達は、戦死した先輩、同僚の魂を慰めるため、東京を中

心に若潮会（陸軍船舶隊）を結成し、会長を選出、そして会長を主力として、戦死した先輩同僚の皆様に対し、最低でも年二回、毎年七月十三日の「みたま祭り」と若潮会総会を開催する毎年十一月の第二日曜日には、靖国神社参集殿に集合し、本殿に昇殿し戦死した先輩同僚の英霊に対する供養を実施しております。しかしながら我々の年齢も超高齢に達しており、今後いつまで続けてゆけるかが心配されるところであります。

*1 軍人勅諭（ぐんじんちよくゆ）

「軍人勅諭は、一八八二年（明治十五年）一月四日に明治天皇が陸海軍の軍人に下賜した勅諭である。

十六 父から聞いたこと

吉祥寺南町

芝

綾子

父は軍隊に入営した頃ガリガリに痩せて居たので衛生兵を志願して衛戍（えいじゆ）病院（陸軍病院）において、教育を受けそこで兵士の生死と家族の思いを目の当たりにして来た人でした。

戦争は終盤になり、父の新婚時代に毎日遊びに来て、息子の様に甘えていた男の子が「今度、中島飛行機工場の守備隊長として着任しました。」と突然尋ねて来たそうです。

父は京浜工業地帯の主立った軍需工場へ石炭を納める仕事の関係で、毎日各工場を廻っていたので、第一回の空襲の爆撃を工場敷地内で受けて九死に一生を得、爆弾の威力について身を以って体験したので、その話を尋ねて来た海軍の将校に詳しく説明して、兵士の家族の悲しみを思い「高射砲ではとても太刀打ち出来ないから部下を無駄死にさせてはいけない。」と強く意見を述べたそうです。

中島飛行機工場が爆撃された翌日、父が現場に見舞いに行くと、包帯でグルグル巻きにされ松葉杖をついた知人の将校が現れ、そのまわりに部下が集まって来て「お蔭で我々はこうして無事に生きていられます。」と父に向って

涙を流しながら、口々にお礼を言ったそうです。知人は「おじさんに言われたので、警戒警報が出ると責任者の私と見張り役の部下一人だけ部署に残して、他の部下は安全な場所へ移動させたので私だけが済みましたが、見張りの部下を死なせてしまい可愛相な事をしました。」と礼と報告を受けたそうです。陸軍の守備隊は警報が出ると全員各部署に就いたので、多くの死傷者を出したと聞いたそうです。

父は仕事柄、日中戦争の頃から既に軍需工場の現場で、外国航路の航員から生の海外事情を聞いて戦争の拡大を予測し、更に心ある軍の上層部の人の集まりの場で、密かに短波放送で海外の情報を収集していた友人等からの情報により、当時の日本の現状を相当正確に把握していたので、日本の敗戦は遠くないと予測していました。日本を再生する為に有能な特に若者や人材を死なせてはいけないと強い信念を持って行動した中の、これは一例です。

吉祥寺南町の我家の前の道を歩いていた人に機銃掃射の弾丸が二発発射され、その中の一発が屋根瓦に当たって瓦が割れたそうです。

私が小学校に入学する前年、紀元二千六百年の大きな式典があり、入学した年から国民学校と名称が変わり、そ

の年の十二月に太平洋戦争に突入しました。新制中学の第一期生として新制高校へと、戦前と戦後の全く違う教育を制度が変わる毎に二通り受けた特異な経験をしています。半年余でしたが学童集団疎開も経験しました。

十七 アメリカB29の爆弾焼夷弾が

私の頭に落ちた日　〜孫たちへの証言〜

御殿山

清水 しみず

正也 まさや

一九四五年八月十五日、私は滋賀県大津市の海軍魚雷工場にいた。県立膳所中学二年に疎開転入学してすぐ、学徒勤労動員により、夏休みを返上し、雑役夫として大八車にエンジンを積んで倉庫から倉庫へと運ぶ。敵機空襲のサイレンが鳴ると、裏山に避難する。女学生が爆弾で片足を負傷した。正午の重大放送を聞けという。昭和天皇の録音放送は、意味不明であった。中学生と高等女学生が整列して作業小屋からのラジオ音声を聞いている。「戦争に負けた」と誰かが言う。冗談だろう、これから本土決戦だといっているときに！

午後は、女学校生徒は仕事をしない。ジュラルミンを磨く手を止める。もう魚雷を作る材料がない。熟練工もない。

我が家は、六月五日に焼夷弾の集中投下により、焼け野原と化した。神戸市郊外御影町の住宅街で、祖父鶴吉が逃げ遅れて死体で掘り出された。「おじいちゃん、ぼくがおんぶして逃げる。」といったら「わしは足が悪いさか

い、ここに居る。お前ら逃げえ。」その夜は焼け残った栄二叔父宅に泊めてもらう。

そして六月、姉富貴子の嫁入り先に、一家は転げ込んだ。滋賀県草津駅から徒歩三十分の治田（はるた）村だ。父米一（よねいち）は大阪の親戚宅に下宿して仕事を続ける。兄良夫は、二月に病死していた。兄甲子雄（かずお）は、姫路連隊へ学徒動員により入営中だ。母タカと姉美佐子と私の三人が、姉の嫁入り先の離れに世話になった。姉の夫久徳茂雄は、転職のため名古屋から帰京していた。

「この戦争は軍閥と財閥とが始めたんだ。」という。姉の義弟修も学徒動員中。私は、弁当を作ってもらい、汽車で通勤する。満員の蒸気機関車にやっと乗れても、トンネルを通過する間、熱く真つ黒な煤が鼻の穴をふさぐ。朝七時三十分から、工場内で一時間授業を受ける。昼弁当は、白米飯にジャガイモだ。農家だから食えるものばかりだ、有難う！

転校生ちよつと来いといわれ、倉庫裏に行くと、転校生の癖に生意気だという。私は親分にこの本おもしろいよと渡す。「地下鉄サム」栄二叔父に頂いた本だ。親分は、ニコニコして、「そうか貸してくれるんか。」という。それっきり二度と返してくれなかった。

戦争に負けても、琵琶湖干拓工事の勤勞奉仕に行く。久徳の親戚松原春男という同級生が居た。体格がいい。十月に、父と復員した兄が、焼け跡にバラックを建てて、私たちはそこに住んだ。焼け跡に、野菜を作って食べた。滋賀県で初めて農家の暮らしを体験した。僅か三ヶ月だった。が、稲、麦、馬鈴薯（ばれいしょじゃがいも）、大豆の畑を体験した。

空襲体験は、三月、神戸が連夜、空襲警報で、夜半に起きた。西の空が燃えて赤く焼けている。五月、近所に爆弾が落ち黒煙が上がる。我が家は、ガラスが割れた。そして六月五日朝、神戸市郊外に三百五十機が三千トンの油脂焼夷弾を投下した。一発が空中で三十六発に分解する。油脂だから水では消えない。鉄筋校舎も窓から火を噴いている。硝煙で、暗くなり、息苦しい。逃げるしかない。何を持って逃げるのか。花壇の防空壕は、無防備だ。母がミシンをそこに埋めた。後でこのミシンは生き返る。

逃げてても逃げててもB29の編隊が繰り返して焼夷弾を落とす。隣の肥塚のお父さんは防空壕で直撃弾を頭に受けて、動かない。お母さんと女学生と幼児を親戚の男が、防空壕から掘り出して逃げた。女学生は痛い痛い泣きながら走る。腕に火傷したのだ。金持ちの生駒家の人も、屋

敷に居れず、石屋川に体を沈めていた。道路の油の炎を踏んで走ろうとしても足がもつれ、口が渇く。

その夜、栄二叔父の二階で寝ようとしても、チロチロと炎が消えないで、私を追ってくる。十四歳の私が体験した戦争は、わが町が戦場になる、残酷な空爆から逃げようと、地上ゼロメートルで、這い回ることであった。

アメリカ軍の戦略爆撃の目標は、木と竹で出来た市民の家を焼くことだ。庶民の戦意を殲滅（せんめつ）する事だった。アメリカ軍が調査した結果、わが町を焼かれた市民は、本土決戦という掛け声にも、もはや反応しなかった。もう戦えないと思った。だが直接被害を受けなかった市民は、まだ戦えると思っていたという。

十八 黒板は木の枝に

吉祥寺東町

竹山たけやま 悠紀子ゆきこ

数年前、六十年振りに遼寧省撫順（りょうねいしゅうぶじゅん）を訪れた。瀋陽（しんよう 旧奉天）からタクシーを飛ばしたのだが、遠くから空気は石炭の臭いが・・・そうだ！私はここに住んでいたのだ。

引き揚げの貨物列車が出発した撫順駅、姉たちの通った小学校、父が働いていた満鉄病院、そして高台の社宅、ここでは何でもそのまま残っている。「当時と殆ど変わっていません」と流暢な日本語のガイド。私の様な観光客が多いとのことで巡る場所も心得たものだ。

父の転勤は三年毎でブハト、横道河子（おうどうかし）、ハルビンと移動し、撫順で終戦を迎えたのだった。

「寒い北風 吹いたとて おじけるような子どもじゃないぞ 満州育ちの私たち」何時も歌っていた満州唱歌だ。「ママ、ロシア兵が来たよ！」遠くに兵隊を見つけて私のご注進。兄の制服を着た坊主頭の母は押し入れに隠れる。兵隊が数人で「女を出せ」とやってくるのだ。わたしと姉、祖母の三人でトイレの奥にある隠れ部屋に入ったこともあった。ロシア兵がガタンとドアを開けてトイレ内をのぞい

ている気配を今も覚えている。兄は父と夜警団の一員となり棍棒を持って立った。当時十三歳、中学一年の兄は、どんなに怖かったことだろう。

敗戦となれば、撫順の日本人は近くの河にガソリンを撒いて火をつけ、その間に通化（つうか）というところまで逃げることになっていた。青酸カリの管理責任者だった父は戦後引つ張られて留置所に入れられ、母は差し入れに通ったという。中国人を殺すつもりだったのだろう、と言うのが尋問内容だ。ソ連軍は終戦の二週間前に攻め込んで来たのだが、命令を下すはずの関東軍は、我々民間人を棄てて逃げ、既にいなかった。

我が家は社宅の中では上等だったらしく、ソ連軍GPU（ゲーペーウ）司令官の宿舎になり即、追い出された。引越した家ではその後、国民党・蒋介石軍の連隊長と当番兵に二部屋を提供、私は可愛がられて朝礼では連隊長に抱かれ、イー、アル、サン、スーと点呼で番号を言う兵隊たちに敬礼を返していた。内戦が始まり、代わってやって来たパーロ（八路軍・毛沢東軍）の兵隊たちとも同居した。日本人に危害を加えてはならないという厳しい指令が発せられていたという（以德報怨）。兵隊たちは7〜8名で車座になって白菜やネギ等の野菜と春雨、豚肉で鍋を作る。味は塩だけなのだが、これがとてもおいしい。背囊（*1）

の上には米を詰めた靴下が縛り付けてあり、洗わず鍋にザ
ーツと入れオジャにする。私は毎晩お椀持参でお相伴した。
五歳の私に事情は何も知らされていなかったし、理解する
はずもなかった。生まれた土地柄、私に外国人に対する警
戒心は全くなかった。ロシア人に対しても。

その頃、父は院長を降格になって中国人院長の下、同じ
病院で働き、北方から避難してきた日本人の救護をしてい
た。小学校が収容所となっていたが、毎日悲惨な光景を目
にしたという。逃げる途中で身ぐるみ剥がされ、マータイ
（麻袋）を身にまとってやっと撫順にたどり着いた人々、
子どもを失い気が狂った様な人、呆けてしまつて足腰の立
たない人、赤痢、疫痢その他、病気の蔓延、それは、それ
は気の毒だった、と言っていた。

中国は専門職を持つ日本人を帰国させなかった。特に医
者で父より若い方たちは八年以上残され、各地を転々とし
たという。

昭和二十一年の春、学校が始まり私は小学校に入学した。
兄弟たちは七カ月間、学校がなかったそうだ。学校は収容
所になっているので、神社の境内に画版と組み立て椅子を
持つて通う、写生スタイルの青空学級だ。朝礼が終わると
小さな黒板を持った先生について歩く。境内に続く林の中
に適当な枝を見つけ先生は黒板を掛けられた。そこが教室

という訳だ。寒くなつて来た頃、坂下の暗く汚いアパート
の様な所が学校になった。そこにはオルガンが一台あり、
学芸会も開かれた。当時、集団登下校をしていたと記憶し
ているが、我々に危険はなかった。ただ、親が知らせない
のか友達が突然いなくなる、引き揚げが始まったのだ。ク
ラスの人数はどんどん減っていった。

翌年の夏、ついに我が家にも引き揚げの許可が下りた。
荷物はリュックひとつと決められていた。私はヤカンを持
った。水を確保するための重要な任務だ。母はビスケツト
を沢山焼きイチゴやミカンの形をしたドロップを用意し
た。甘く、きれいな色を思い出す。

我々は撫順駅に集められ、貨車に載せられた。病人は箱
車だったが、一般は無蓋車（むがいしゃ）だ。父は病人付
き医師兼引率者だったのでほとんど会うことはなかった。
途中で度々止まったが、その度に皆で腕時計他貴金属を運
転手の中国人に握らせ動かしてもらったのだそうだ。長く
止まっていると匪賊（*2）に襲われる危険があった。そ
して、二日か三日でコロ島に着き貨物船に乗ったが、与え
られた場所は船底の荷物置き場、ムシロが敷いてあり、天
井は九十センチ位で、その上には他人がいる。家族で立つ
て歩けたのは私だけだった。でも、もう安心、皆は軍票を
海に撒いたという。

船の中で亡くなられた方がいらして水中葬が行われた。遺体を海に沈め、その周りを一周するのだ。ボーツという汽笛、あの音を忘れない。

四日くらいで佐世保に着いた。島が見えると、甲板で大人たちが「日本だ、日本だ。」と叫んでいたが、初めての日本なので何も感じなかった。米国進駐軍からDDT（*3）を身体中真っ白になるまで振りかけられ入国。無一文の私たちが日本政府からもらったお金はお米一升分だったそうだ。

「引き揚げの皆様、御苦労さまでした」という立て看板をいくつも見ながら東京を目指し駒込の親戚を訪ねたが、一面焼け野原で所々バラックが建っている程度、親戚は疎開したままだった。別の親類の世話になり、家探しをして北多摩郡武蔵野町吉祥寺に住むことになり、父は林医院を開業、私は武蔵野第三小学校二学年に転入した。

* 1 背囊（はいのう）

軍隊で徒歩部隊の将兵が背負う袋

* 2 匪賊（ひぞく）

「集団をなして、掠奪・暴行などを行う賊徒」を指す言葉

* 3 DDT（ディー・ディー・ティー）

有機化学物質のひとつ。一九四〇年代に殺虫性のあることが発見され、第二次世界大戦前後から殺虫剤として大量に用いられるようになった。後に自然環境への悪影響があることが明らかになり、日本では一九七一年に使用が禁止された。

十九 戦争のない平和な世の中へ

八幡町

佐々木

由里子

昭和十年生まれの私は、大田区蒲田の国民学校に入学しました。はじめての遠足の日に空襲があり、時間を遅らせて行った事が思い出されます。三年生の時、おばあちゃんがいたので、早目に埼玉県の熊谷に知人を頼って家族で疎開をしました。

通っていた学校には奉安殿があり、毎日そこでおじぎをして教室に行きます。中には天皇と皇后の写真が飾ってありました。教科書は、全国どこでも同じである国定教科書を使っていました。授業では、教育勅語と九九の暗記を同時にやったことを覚えています。また、音楽では「ドレミファ…」などは使えなくなり、「ハニホヘト…」と音階を読むことになりました。特に体操は重視され、裸足で授業を受け、女学校に入るには勉強だけでなく体操が出来ない人は入学出来ないといわれていました。跳び箱や鉄棒など苦手だった私は、放課後に一生懸命練習をしました。

兵隊さんの食糧にするのだと、イナゴ取りをして学校に持って行ったり、堆肥作りのために草を刈って干し草

にし、一人何キロという目標で学校に持っていきました。どれも修身の点数になるといわれたので頑張りました。田んぼの向うとこちらで向き合って、手旗信号の練習もやりました。学校の授業も戦争一色となり、女の子でも図画の時間に飛行機を描いたり、お習字では「必勝」とか「本土決戦」などと書きました。

朝礼の時、ガリ版刷りの歌詞がくばられ、①「勝ち抜くぼくら少国民、天皇陛下の御為に死ねと教えた父母（ちちはは）の……②後に続くはぼくたちが君は海軍予科練に、ぼくは陸軍、若鷲に、やがて大空とびこえて、敵の本土の空高く、日の丸の旗を立てるのだ」とか、「命一つとかけがえに、百人、千人切ってやる、日本刀と銃剣（じゅうけん）の切れ味知れと敵指令部に、死ぬを覚悟の切り込み隊」など、子どもたちが戦争に行つて闘うこと、命を捨てて頑張るんだと教え込んでいきました。空襲が激しくなり、授業中も避難するなどしたため、授業の時間が足りなくなり、夏休みも学校に行くようになりしました。昭和二十年八月には、敵の飛行機からピラがまかれ、「花の熊谷、忘れやせぬぞ、お先に静岡茶の香り」と書いてあったと、大人の人が読んで教えてくれました。

八月十四日の夜、いつもと違う空襲でした。外に出て

みると照明弾が落とされ昼間のように明るく、驚いてみると近所の大家さんのおじさんが、今日はいつもと違うので防空壕には入らないで、すぐ逃げようといわれ、あわてて何も持たずに逃げました。歩きながらまわりを見ると、すべて焼けこげてまっ黒く柱だけ残った家や、田んぼの青い稲が、チョロチョロと燃えているのを見ながら桑畑で一晩明かしました。前方の軍需工場もまっ赤に燃え上っていました。

夜が明けると大家さんのおじさんが様子を見に行ってくると行き、しばらくして戻って来ました。みんなやられてしまっているとの事でした。これからどうしたらいいのか、今夜はどこに泊まるのか、街の中を歩きながら炊き出しのおにぎりを食べ考えていました。街の中は、ほとんど焼けて、何ともいえない臭いが、いつまでも鼻について忘れる事が出来ませんでした。焼け跡に行き、思い出のある布のはし切れなどを拾ってきました。中山道のまん中あたりに開かなかった焼夷弾がそのまま落ち、そのはずみで三十六発が飛び散り近くの家に飛んで燃えたのだと聞きました。幸い私の通っていた学校は燃えないうですみました。私たちは知り合いの家に間借りさせてもらいました。

不思議な事に、今まで堂々と習字を書いていたのに、

焼け出されたあとは字がちぢまり、小さな字しか書けなくなっていました。

敗戦をむかえ、先生から今までの戦争は間違っていたといわれ、教科書の中の戦争の事や、神話などの記事は、全部墨でぬりつぶすようにわれました。

戦争が終わって良かったと思っただけ、学校でいばっていた兵隊さんがいなくなった事と、夜、明かりがもれるのを防ぐため電灯に黒い布をかぶさなくなり、明るくなった事です。

教育の内容は、すっかり変わりました。憲法も教わりました。主権在民、民主主義、男女同権などと共に、日本は戦争をしない事を憲法に書かれた事を教わりました。また、天皇は人間になったことも教えてもらいました。新制中学になると内容が詳しく書かれた社会科の教科書には、会社に入社する時は労働協約を結ぶとか、労使間で話がうまくまとまらない時は、冷却期間を置くことが出来る等、今まで知らなかった事が、いろいろ書かれています。高校入試には全面講和か、単独講和かという問題が出るからよく覚えておくようにと言われたので暗記をして覚えました。その問題が試験に出ました。

障害者にとって、戦争中は大変だったことが大人になって分かりました。富国強兵という考え方で、戦争に行け

ない障害者は、家族共、大変苦しい思いをしたようです。食糧難で配給物を分ける時も、ゴクつぶしといわれ、小さくなって暮らしていたと聞きました。ある集まりに行った時、障害をお持ちの方が、

「障害の子がいると分かると、まわりの目がつらいという理由から私の戸籍は抹消されてしまいました。私には戸籍がありません。」とお話しをされていました。

戦争では精神や身体に障害をきたす方がたくさんいましたが、戦時中、障害者の方は人間らしく生きる事が出来なかったのです。人権も守られないのです。

戦争のない平和な世の中が続く事を願っています。

二十 あの時私は十歳だった

中町

岡

君代

○ 齒の根ガクガク早春の空紅蓮ぐれんの火

(三月十日東京大空襲を三鷹から見る)

○ 燈火管制はくわんとくせい春灯とはほど遠く

○ 空襲警報手早く服を春の闇 (中島飛行機の空襲)

○ 上野駅地下道春宵人の群 (富山県伏木へ疎開)

○ 昼休みべんとうなくて野蒜のびる喰む

○ 「じょう葉めし」木の芽とわずかのごはんつぶ

○ 焼野原棒杭ばかりの東京よ (三鷹に帰る)

○ 父丹精の青きトマトにかぶりつく

(戦争終われど飢える日々)

○ いもの蔓つるゆでてひと日の食事とす

○ 夏の畑「ずんべら」という雑草喰ぶ

○ 卓袱台ちゃぶだいの藜あかぎのおひたし旨し旨し

○ 秋の校庭頭から DDT浴び皆ま白

○ 春燈やむさぼるように本を読む (明るい電燈が戻る)

○ 進駐軍ハムのような顔に春陽さす

○ 春浅し混血の「ディアナちゃん」今いづこ

二十一 原爆の落ちた日

境南町

三浦 みうら

澄 きよし

昭和十九年夏、昭和十六年にはじまった太平洋戦争の戦局は悪化していた。当時、私は成蹊小学校六年生。一学期終了後、疎開といって小学生は全員都会を離れることになった。地方に親戚などのある人は縁故疎開といって縁故先へ、また、縁故のない人は集団疎開といって集団で都会を離れた。

私は、長崎県の島原半島にある現在は南島原市の有家(ありえ)町という小さな田舎町の叔父の家に疎開した。母が生まれ育ったところである。いざ、疎開するときになって、家では親兄弟と、学校では一年生の時から机を並べた友達と離れ離れになるのが本当に辛かった。この有家町は、平成二年に噴火した雲仙普賢岳の麓にあり、最近では島原そうめんの生産地として少しばかり名前が売れている。

昭和二十年、太平洋戦争の戦局は更に悪化していた。この頃、そのような小さな田舎の町にも毎晩のように空襲警報が鳴り響いた。その度に防空頭巾を被り、近くの山に掘ってある横穴式防空壕に避難した。上空を米軍の爆撃機B

29の編隊がわがもの顔に通っていく。恐らく上海から長崎市やその周辺の軍需工場を爆撃に行く通り道になっていたのであろう。迎え撃つ日本の空軍の姿は全くない。そのような時でも、やがて神風が吹く、日本は必ず勝つという日本の勝利を信じていた。しかし、間違いなく戦争は末期であった。

八月九日、その日は晴天で暑い真夏の太陽が照りつけていた。午前十一時過ぎ、山の方で「ゴロゴロ・・・」と雷のような音がした。「こがんよか(こんないい) 天気は雷じゃなかるう。B 29でもやっつけたんじゃなかるうか」などと大人達が呑気に話し合っていた。

それから2〜3時間経った午後2時頃、まだ真つ昼間というのに空が暗くなってきた。しかも黒く。まるで日蝕の時に燻し(いぶし) ガラスで太陽を見る時のように、黒い空に太陽がくつきり見えるようになった。異様な光景に近所の鶏がなき出す。通りすがりの人達が何が起きたのだろうかと話し合っていたが、何が起きていたのか誰にも分らなかった。

当時、新聞は遅配していた。偶々配達されてきた新聞に「六日広島に特殊爆弾、被害甚大」というような記事が載っていた。

黒い空は、そのまま夕方の黒い闇に消えていった。その

頃になって、どこからともなく長崎市内が相当やられたらしいという噂が伝わってきた。野次馬根性で近くの島原鉄道の有家駅（今はバスだけで鉄道は通っていない）に行ってみる。下り列車から、顔や手が真っ黒に焦げた人、着ているモンペがビリビリに裂け傷を負っている人、焼けただけれた肌があらわになっている人など怪我をしている多数の人が降りてきた。恐らく長崎市内で被爆した人達だったのであろう。

昼間の黒い空の正体は煙だったのだ。長崎市の被爆の煙が山を越えて流れてきていたのだ。

それから六日後、八月十五日、長い戦争は終わった。日本は敗れた。後に、八月六日広島に、八月九日長崎に投下された特殊爆弾は原子爆弾だったことが分った。あの日、あれが、「原子爆弾」だったのだ。

何年か経ってから、長崎市と広島市を訪れた。街はすっかり復旧していた。資料館で当時の写真や資料をみて、その悲惨さ、残酷さにあらためて涙した。二度と戦争は起こしてはならない。そして、もうあのような悲劇は見たくない。戦後七十年近く経った今、平和の尊さを噛みしめている。

二十二 孫たちに伝えたい私の戦争体験

台湾からの引き揚げ

境南町

清本 きよもと

和子 かずこ

日本が太平洋戦争に負けた一九四五年八月、私は台湾東海岸の太平洋に面した小都市、花蓮港（かれんこう）市立小学校の六年生でした。戦争が始まったのが二年生の時でしたから、小学生の間ほとんど戦争が続いていたわけで、当時の小学生は今の小学生が聞いたこともないような戦争用語をたくさん知っていました。

たとえば「艦砲射撃」とか「艦載機」って、なんだかわかりますか？「艦砲射撃」は敵が軍艦の上から陸地へ向かって砲撃をしてくることで、「艦載機」というのは空母が積んでいる小型の戦闘機のことです。私の家は海からはだいぶ離れていたのですが、艦砲射撃の弾丸が飛んでくることはありませんでしたが、艦載機の空襲はたびたびあって、一度、登校の途中で並木道の上に突然艦載機が一機現れて、機関銃で撃たれたことがあって、木の陰に身を伏せながらここで死ぬかと思いました。今でもあのときの恐怖は忘れません。

昭和二十年に入ると日本は敗戦への坂を転がり落ちて

いきました。二月にはマニラがアメリカ軍に占領され、三月十日の東京大空襲があり、三月の末には硫黄島の日本軍が全滅し、「玉碎」（ぎよくさい）という言葉が強く焼き付けられました。

四月に同盟国のイタリヤとドイツが敗れ、六月にはアメリカ軍が沖縄を占領するなど、当時の教育では日本は神の国であり、危急存亡の時には神風が吹いて、日本の国を守ってくれると教わっていたものの、敗色濃い情勢は子どもながらにわかっていたような気がします。八月六日に広島に原爆が落とされ、九日に長崎に原爆投下があつて、とうとう昭和二十年八月十五日。

前の日から正午に重大放送があると聞かされていた私たちは、教室で天皇陛下のお言葉を聞きました。雑音が多く、また、言葉も難しかったので、小学生の私たちにはほとんど理解できなかったのですが、日本の無条件降伏を求めるポツダム宣言を受諾する、国民は決して軽挙妄動（けいきよもうどう）せず、国の再建に尽くしてほしいという内容だったと先生にきかされました。

敗戦後の台湾での暮らしの中で、時折思い出す光景があります。蒋介石の軍隊が台湾全土に進駐してきた時のことで、私たちが青天白日旗（せいいてんはくじつき）の小旗を振りながら出迎えた中国の兵士たちは灰色の綿入

れのような軍服姿で船から降りてきました。多分満州あたりの寒い地域から転戦して来た兵士たちだったのでしょか、温暖な台湾の気候にはそぐわない服装だったのを覚えています。その時進駐軍歓迎のために中国語で歌わされた中国の国歌と孫文を称える歌は、今でもうる覚えながら歌うことができます。

四月も終わりになって引き揚げを希望する日本人は港に近い学校の講堂に集められ、そこで何日か暮らしましたが、ある日突然荷物をまとめて棧橋まで行くようにと言われて、港へ行くと旧日本海軍の駆逐艦が待っていました。戦争中にたびたび目にした海軍旗ではなく、日の丸の旗がひらめいていたのを覚えています。

駆逐艦というのは高速で海の上を走り、魚雷を放って敵の艦船を沈没させる戦闘用の船ですから、細長い魚のような形をしていて、乗り心地は全くよくありません。しかし、狭い船倉に寝返りを打つ隙間もないほどにぎゅうぎゅうに詰め込まれたのですから、もともと乗り心地どころの話ではなかったわけですが、出航してから到着するまで、揺れに揺れて、このまま波間に沈んでしまうのではないかと思つたほどでした。もちろん食事はおろか水さえ喉を通りませんでした。

揺れが収まり、港に着いたのがわかった時、「ああ、ま

だ生きているんだ」と思ったのを思い出します。命からがら上陸した私たちを待ち受けていたのはDDTを頭から浴びせられるという屈辱的な防疫措置でした。のちになって海外からの帰還者がシラミやその他の害虫を持ち込まないようにとGHQの命令で取られた措置だと知りました。

お腹がキューキュー鳴るほどすいていましたが、私たちに与えられた食事は真つ赤な高粱（こうりゃん）ご飯でした。高粱というものを初めて食べた私たちはお腹がすいているのに、高粱がのどに引っかかってどうしても呑み込めない。でも食べ物はほかには何もなくて、涙を流しながら食べたのを思い出します。

この後、私たち親子七人は背中にリュックを背負い、父は両手に大きなトランクを提げた姿で、鹿児島駅から日豊線に乗って大分駅にたどりつくのですが、どのようにして港から鹿児島駅に行ったのか、列車の中の様子はどうだったのかなどは思い出せません。映画の一場面のように私が鮮明に覚えているのは、大分の駅前に立った時のことで、見渡す限り焼け野原となっていた市内の様子を見て、絶望に打ちひしがれそうになったのを覚えています。これが私の戦後の始まりです。

二十三 私の子ども時代、

日本はずーっと戦争をしていた

吉祥寺本町

石渡 いしわた

俊子 としこ

私は昭和六年一月生まれました。

忘れられない母の姿

昭和十八年の夏が過ぎると、東京は昼夜ひんぱんに空襲警報のサイレンが鳴った。麹町紀尾井町に住んでいた私の家は、父母と子供七人、そして叔母の十人家族は、空襲を逃れ遂に四か所に分散して住むことになった。

私のすぐ下の小学校三年の妹と六歳の弟と幼い三歳の妹は叔母が預かり祖父の故郷の滋賀県へ泣く泣く疎開。小学校六年の弟は麹町小学校から学童疎開で山梨県の大月のお寺へ。私立三輪田高女一年（中一）の私は、父の仕事先となった山形県鶴岡に疎開が決まった。大学生の姉と兄父と母は東京を離れられなかった。

十二月に入って、私は母に連れられ、鶴岡へ向かう列車に死ぬ思いで乗り込み、上野駅を出発した。汽車は網棚の上にも男の人が乗り、通路と言わずトイレの中も隙間なく辛うじて息の出来る状態の避難難民を満載して動き出し

た。途中水上駅付近で敵機空襲の知らせ。汽車はストップ乗客全員汽車から飛び降り、近くの農家に分かれ泊めてもらった。翌未明に「汽車が出るぞー」の知らせ。私と母は線路からタラップが高くあがれなかったが、男の人たちに引つ張ってもらい乗り込むことができ、三日かかってやっと鶴岡に着いた。すぐさま県立鶴岡高女へ行き転校の手続きをした。「私立から県立への転校は本来ならば許可できない」と渋る教頭先生に母は何度も頭を下げてお願いしていた。私を預かってくれる鶴岡市内の下宿の小母さんは純朴な優しい人で、母は安心して東京に戻れると言った。その日の夜になって私は、

「山形弁もわからない、知らない学校、知らない土地に一人置き去りにされるのは嫌だ、やっぱり母と一緒に明日東京に帰る。」と泣いた。

その時、部屋にあったラジオが「大本営発表、大本営発表：」と鳴り出した。そのとたん母は黒い木枠のラジオにしがみついた。滋賀方面は？山梨方面は？東京は？：B29爆撃機の方向が告げられる度に「オ、オーツ」と狂人のように吠え声をあげて身もだえしている母の姿。戦後六十余年経った今も、あの時の母の悲痛な姿が強烈に思い出される。

尋常小学校が国民小学校になった

私が麹町小学校一年生に入学した年に日中戦争（支那事変）が起こり、昭和十六年十二月八日、五年生になった年に太平洋戦争（大東亜戦争）に突入した。

小学校の名称が尋常小学校から国民小学校に改められ、同時に授業の中身も急激に変わっていった。子どもはお国のために戦い、天子様（天皇）のために命を捧げる赤子。神国日本。八紘一宇。（*1）大和魂。一億火の玉。鬼畜米英。ぜいたくは敵だ。撃ちてしまむ。このような言葉が毎日の朝礼や授業の中で交わされた。

体操の時間は、ドッチボールの代わりに一列横隊で「かしら〜右！」などの号令のもと行進の練習となり、私の大好きな水泳の授業は、空襲の危険から中止となった。女子は授業の中になぎなたが新たに加わった。

毎年恒例の華やかで楽しい学芸会のプログラムは、「楠木正成桜井の別れ」の劇や国粹的な和歌の朗詠だけとなった。

地理の授業では、班ごとにアジア圏を皆で分担し、地図を大書きして発表することになった。インドを担当した親友の柴田さんは、絵が上手で発想がとても豊かだった。ガンジの顔を大きくバックに描き、その中にインド国の地図を描いた。それが何とも印象的で、素晴らしい着想や手

法を尊敬の念で見つめていると、担任の先生は、「ふざけている！」と激怒し、生徒たちの目の前でその絵をはがしてしまった。あの時の凍るような悲しさは今でも忘れられない。小学校の空気は次第に暗くなっていった。

ある日、退職された校長に代わって新しい先生が朝礼台に立たれた。この頃になると、ほとんどの教師は詰襟のカーキ色の国民服を着用していたが、その先生は茶色の背広とネクタイ姿だった。

「皆さんは大和魂こそ尊く素晴らしいものと教えられています。アメリカにもアメリカ魂があります。大和魂だけで戦争は勝てるものではありません。」と話された。私は最前列にいたが、この日の朝礼のお話は新鮮で、目からウロコ、はっと目が覚める思いだった。「鬼畜米英、アメリカ人は鬼」と聞かされていたのに、アメリカにも大和魂と同じ人間の魂があるとは…。

しばらくするとその先生の姿は見かけなくなりました。大人も子どもも自由にものを言い、自己を表現したら非国民とされ憲兵に連行される時代になっていった。

ついに疎開。鶴岡、湯の浜の生活

私は、湯の浜温泉駅から小さな電車で三十分乗って鶴岡市内の県立校に通った。その年の冬の東北は七十年来の大

雪に見舞われ、二階から道に降りられた。

東京しか知らない私にとって雪国の生活は、辛く悲しい中にも楽しいことも一杯あった。東京ではまともな授業ができなかったが、県立鶴岡高女は疎開学童を抱えながらもすっかりした授業を行っていた。冬の体育の授業はもっぱらスキーだった。実技は鶴岡城址公園に全員スキーを担いで行き、築山から一人一人を滑らせた。

二月のある日、学校恒例のスキー大会が開催され、全校生徒がスキーをはいて早朝集合した。ストックを頼りに雪の庄内平野を四列縦隊で四時間余り粛々と行進する。満州広野を行く皇軍のように。ゴム長靴にバンドを引っかけただけのスキーなので途中何度も転んだ。転ぶと瞬時に列の横に出なくてはならない。震える手でバンドを整えている間にスキーの列は遙か彼方に遠ざかっている。行軍の最後尾の姿が見えるところまでは、死んでもいいから追いつかなければならない。油断したら行軍の姿は雪原の中に消えてしまう。私は苦しくて死ぬかと思ったが、何とか頑張つて行軍のどん尻に喘ぎながらもついて行くことができた。

山を切り拓いたような場所に到着すると、直径十メートルほどの円の雪の腰掛を設営し、中央の焚火を囲んでお弁当を食べた。開会宣言のあとクラスごとの一斉滑降や選手による大回転競技などを行い、二時間ほどで大会は終了し

た。その頃になって途中で落伍した生徒たち（ほとんどが疎開生）がフラフラになってやっと到着した。しかし、帰りの行軍が容赦なく始まる。私にとってこのスキー行軍は最も辛く、最も貴重な体験となった。

「落伍したらとんでもないことになる。ビリでも良いから何とかついて行けるよう死ぬ覚悟で頑張る。」という辛抱強い東北人の根性を学ぶことができた。

湯の浜の海岸に住んでみて、冬の日本海は怪獣のように荒れ狂うことを知った。まるで、理科室で見た人体解剖静脈図のようだった。黒く濁った海面に波頭の白い筋がからみつき、それが地平線から迫ってきて、不気味な形相をしていた。

春になると海は優しい姿を見せた。浜に漁師の舟が着くと私は弟とバケツを持って飛んで行き、落ちている鰯を拾った。海のおかげで私たちは栄養失調から救われた。

夏になると浜で土地つ子とよく泳いだ。高さ三メートルほどの長岩によじ登り飛び込みの練習をした。強烈な大波の勢いに全身を預け波と一緒に岩に突進しその瞬間に岩のでっぱりを両手でがっつと掴む。そして間髪を入れず猿のように岩の頂上まで駆け登らなくてはならない。一秒でも遅れたら凶暴な潮の力に海底まで引きづりこまれ、スクリーンに巻き込まれたように回転し死にそうになる。だが、

成功した時の快感はたまらなく何度も挑戦した。

しかし、こんな楽しみもこの夏（昭和十九年）で終わりだった。

食料を求めて

昭和十九年の夏、サイパン島グアム島の日本軍が全滅、日本の敗色は隠しきれず明白になっていった。我が家では十人からの食糧の調達がますます深刻になっていった。焼ける前に東京から運んだ反物、母の着物、姉妹の晴着、掛け軸などリュックに背負って、母と弟（中一）と私（中三）は米どころ庄内平野の農家を一軒一軒回って食料を売ってもらおうようお願いした。やっと米やイモを分けてもらい嬉しかったが、米の重さは尋常ではなく、残暑の畦道をフラフラになって歩いた辛さは忘れられない。それでも私たち一家は、疎開先でも一軒の家が借りられ、家族が一人も欠けることなく、父母の苦労のおかげでどうにか食べていくことができ、恵まれていた。

湯の浜温泉の亀屋旅館には東京からの学童疎開の児童が大勢生活していた。ある日のこと、私は母の使いで知り合いの農家でジャガイモを分けてもらい、イモを入れた籠を下げて亀屋旅館の前を歩いた。いきなり塀の上からバラバラと男の子が降ってきた。あつという間もなく子どもた

ちは籠の中のジャガイモを取って走って逃げた。転がっているイモをあわてて拾い見ると、男の子たちは旅館の塀の上で生のイモを皮のままかじっているではないか。もらったイモはほとんど無くなったが、その子たちが哀れで、そのまま家に帰った。かつての弟の学童疎開の姿と重なり、母も「いいんだよ」と言ってくれた。亀屋に宿泊の子どもたちは皆痩せて、顔色も悪かった。

虱（しらみ）は栄養の足りない人間を好むようだった。湯の浜温泉には共同浴場があり、毎晩妹たちと入浴に行っているうちに忌まわしい虱をもらった。毛虱は黒くて、一本の髪の毛にいくつもの卵を産み繁殖する。白い虱は下着の縫い目にひそみ、巧みに血を吸う。下着の虱はその下着を煮沸すれば退治出来たが、毛虱には苦労した。つげの櫛で丁寧な梳くと新聞紙の上に黒い虫がバラバラと落ちてきてぞつとした。清潔にしてもうつってしまうのだから始末に負えない。終戦後、アメリカのDDTの白い粉を頭の上から体中に撒いてもらうまで悩みは続いた。

昭和二十年、日本国民にとって最も暗い正月が明け、そして三月十日未明、アメリカB 29編隊一三〇機が東京江東地区を爆撃、焰（ほのお）は大火流となつて下町一帯を焼き尽くした。一日で東京の四分の一が焼けた。死者十万人。続いて五月二十五日、山の手地域を爆撃。紀尾井町の

我が家はこの日全焼した。疎開を嫌い学徒動員で東京に残っていた姉と兄は「死ぬのなら家族一緒の所で死のう。湯の浜に来なければ勘当する」との父の強い命令で、焼ける一週間前に湯の浜に来て命が助かった。神の恵みと言えない。

アメリカ軍が、遂に沖縄に上陸したと知らされ、不安と緊張が広がっていった。

八月六日、広島に原子爆弾が投下され、一発のピカドンで二十四万人が死んだ。その日の湯の浜で見た新聞には

「広島に新型爆弾が投下された。被害は大のもよう」とあった。その記事を私もかすかに記憶に残っているが、その新型爆弾が人類破滅の原爆であることや放射線の被害の詳細は報道されなかった。被爆された方には許してもらえないことだが、「また空襲でやられたのか」というくらい湯の浜村民の認識であった。それより「ソ連が日ソ条約を破り連合軍に参戦」の報道は湯の浜村民をふるえ上がらせた。ソ連から日本海を越えてひと飛び、ソ連兵が湯の浜にも上陸するかも知れないという情報が流れた。娘は山に隠した方がよいという人もいて、母は四人の娘をどこに隠したらと生きた心地がしなかった。

八月八日の真昼に、本当にアメリカ艦載機一機が湯の浜上空に現れ、海岸にいた人に機銃掃射を浴びせて去って

った。その日は警報もなく、いきなり爆音が聞こえ、東京で馴れている我が家では、全員綿入れの防空頭巾をかぶって押し入れに入り息を殺していた。後で聞いたが、射撃された人は長岩の周りを伝って、海中に潜って逃れ、けがをしたが助かったそう。それから終戦まで誰一人浜へ出ずに静まり返っていた。そして次の日、八月九日、長崎に二発目の原子爆弾投下。約十五万人、爆死。

終戦の日

八月十五日、その日は鶴岡高女の夏休み中の登校日となっており、私は朝早く学校へ行った。正午に天皇陛下の玉音放送があるから生徒は帰らずに講堂に集合するように言われた。全員講堂に正座して玉音放送を聞いた。前方に座っていた上級生が泣いているのが見えた。私は玉音の内容が難しく理解できなかった。先生は何も説明してくれず、そのまま全員下校となった。

家に帰りつくと、母も叔母も姉もみんな暑さ負けのように畳に寝転んでいた。「俊子、日本は負けたんだよ。」と姉が言った。私は全身の力がいっぺんに抜けて、姉の横に寝ころんだ。誰もかれも虚脱状態となり、魂の抜け殻が歩いているような数日だった。だが幸いなことに、みんな生きていて、食べていかなくはならなかった。子どもたちは

安心して浜で遊べた。目の前の海や砂浜が、山の木々が急に光り輝いて見え、私たちを元気づけてくれた。

戦争が終わり、東京へ

戦争は負けてついに終わったが一家はすぐには東京へ戻れなかった。銀座の店、宝町の支店は全焼、紀尾井町の家は焼け、それに加えて父が愛国心に燃えて設立した庄内航空会社の閉鎖、そしてその膨大な後始末のためだった。今思えばバカな話だが、軍需省の命令で、木製飛行機製造のため、ブナの合板の生産を受けることになり、父は霊山である湯殿山のブナの伐採許可を奔走し、樵（きこり）を苦使して山頂からブナを伐り出して生産したが、間もなく終戦となった。硬すぎて家具には不向きな、そのブナ材が大量に残り、途方にくれたのであった。若くして洋紙店を創業、成功して「わが天職紙屋」と言って誇っていた父は、終戦後四年も紙屋に戻れず同業者に遅れをとってしまい、父の無念さは計り知れない。

紀尾井町の家は焼けてしまい、帰る家がなかった一家もやっと世田谷区上北沢に古い家を見つけ、（当時六万円とか）変り果てた東京に戻った。

終戦後の東京の生活

終戦後の食生活は、戦時中のそれ以上に悲惨なものだった。大豆かす、ふすまの粉で作った真っ黒な蒸しパンは冷めたら若者の歯でも噛めなかった。米は手に入らず、三食さつまいもだったり、空腹をかかえ、食べ物の情報には飛びつく毎日だった。

そんな中、たまに進駐軍からコッペパンが配給された。純白のフワフワのパン。忘れていた本当のパンだ。私はうれしさの余り、「コッペパン音頭」を作詞作曲して、私がコッペを両手にかざし先頭になり、弟や妹たち四人が行列につながり、頭を振り振り歌いながら廊下を踊り歩いた。皆飢えていたが、空襲のない東京はやはり明るかった。

*1 八紘一宇（はっこういちう）

全世界を一つにまとめて、一家のように和合させること。第二次大戦のとき日本が国家の理念として打ち出し、海外進出を正当化するスローガンとして用いた。「八紘」は天地の八方の隅、地の果てまでの意。転じて、全世界の意。「宇」は家の意。

二十四 大連で迎えた終戦

吉祥寺南町

棚橋 たなはし 武雄 たけお

米軍のB29の重爆撃機はしばしば満州の各地に出撃してきていたが、鞍山の爆撃時にその一機が、日本軍の戦闘機の体当たりで爆墜され、十数名の乗員が捕虜になった。日本軍の参謀たちは、その捕虜の尋問のため、英文科出の将校であるぼくを通訳に呼び出した。

ぼくの英語力で、米軍の軍事機密を聞き出すための通訳は、容易なことではなかったが、捕虜たちも大変協力的に尋問に答えてくれたので、ぼくの頼りない通訳でもどうやら数日で勤めを果たすことができた。

ぼくは尋問の済んだ捕虜には、煙草などを差し入れてやり、時々房に入って捕虜と雑談を交わした。『レッツ、シット、アンド、トーク』（座って話そう）と呼びかけると彼等は大変に喜んで、すっかり打ちとけてくるのだった。

昭和二十年八月九日、ソ連が参戦した時、司令部中は冷水を浴びせられたように怖気立った。第二航空軍といっても名ばかりで、ソ連空軍のミグ機やイェリ機と戦える飛行機などいくらかも残ってはいない。ソ連戦車が国境を破り、続々と新京に近づき始めた時、ぼくは地上戦闘隊長を命ぜ

られて、部隊の三十人ばかりの通信兵を預けられた。航空軍司令部には、地上戦闘を指揮できる将校がいないので、歩兵出身のチンピラ少尉にお鉢を回したに過ぎなかった。しかし、そのころは、肝心の関東軍の主力が新京からの撤退を始めていた。それを知って、航空軍のほうも逃げだしにかかったのは当然といえる。今度はぼくに、女子通信手十名と、運命を共にすることを望む敷島高等女学校の勤労員の女学生十五名ほどを收容して、大連に撤退せよという命令が出た。

ぼくが新京の司令部に来て、米空軍の暗号解読の作業が始まった時、通信傍受要員として、敷島高女の女性徒三十名が動員されて部隊に毎日出勤することになり、ぼくは彼女たちの教員にされた。といっても時たま彼女たちを並べて、注意事項や伝達事項を伝えるぐらいで、特別な教育をしたわけではない。教育の方は女子通信手にまかせ、一人に三名ずつの女学生を助手として割り当て、通信傍受を見習わせたにすぎない。

米空軍の暗号といっても、作戦命令のような重要なものは、乱数を機械に取り組んで発信するので難解きわまりなく、とてもぼくの頭で解読などできるものではなかった。

ぼくが相手にしたのは、航空機と基地との交信や航空機同士の間で交信であって、いずれもスピードを要するので、機

械は使わず、口頭でいい合っていた。

アルファベットのABCが、Aはエイブル、Bはベーカー、Cはチャーリーというごく使い慣れた語で、言葉が綴られていた。例えば猫の「キャット」(CAT)なら、チャーリー・エイブル・トメイトという発言で表すので、キャットはわかるが、それが時間なのか、出撃なのか目標なのか、それをつきとめるのが仕事であった。そのためには何百通、何千通という傍受電報が必要で、連日休みなく誰かが受信器にとりついていなければならなかった。

その電報をタイプして英語にするのが、仲本久子というタイプストの役目だった。彼女は東京の女学校を卒業すると姉を頼って新京にきて、軍属として第二航空軍司令部に就職したもので、雑用係としてぼくの班に廻されてきたのだった。

女子たちを収容する昭和二十年八月十三日は豪雨だった。女子通信手十名とタイプストは軍隊の寮にいたので問題ないが、女学生十五人は市内のあちこちの自宅にいる。激しい雨の中での収容はトラックを動かすだけで難渋した。朝から開始したが、十人ほど収容するうちに夜になってしまった。家族たちは既に退出してしまい、ただ一人家に残って、ぼくが迎えにゆくのを待っている女学生たちのことを考えながら、手書きの略図を眺めては車を走らせた。

翌朝、新京駅に入っている長い無蓋貨車に荷物や食糧を積み込み、女子たちを乗車させた。ぼくの車輛だけは軍用なので、一般人の乗り込みはなかったが、他の車輛には一般の市民が集まってきて、我先にと乗り込み、まるで戦場のようなありさまだった。昼近くに奉天の駅で貨車は止まった。

「駅長室に来られるようにとの駅長のことづけです」と、駅員の一人が来て言うので車輛を降りて駅長室に入った。そして、天皇陛下の玉音放送を聞いて、終戦を知った。

かつて、青山学院の学生の時、米英への宣戦布告を知って受けた血の気の引くショックが、今形を現したのを感じた。戦争は終わったが、ここまで連れて来た女子たちをここで放り出すわけにはいかない、と考えて大連に着くと、軍の囑託であった日満商事の蓑毛重役に頼みこんで、社の寮に女子たちを収容することができた。しかし、食糧や費用まで世話になることはできないので、司令部の大連支隊に出向いて、高級将校に支援を頼んだ。

すると、彼はぼくの要求を当然のように拒絶していった。「戦争は終わったのだ。今更女どもを連れてきて、助けてくれなんて、どうかしている。女たちは放っておいても死にはしない。妾になっても、からだを売っても生きていけるのだ」

それを聞いて、ぼくの反抗心は怒りに変わった。「いいでしょう。でも戦争は終わったんですよ。軍隊もなくなりました、軍人の階級も消えてしまった。軍のものだと思つた食糧も現金も明日にでも押しよせてくる中国人に奪われてしまうかも知れないんですよ。それにもう日本には戻らないつもりでしたら、ここで女たちを放り出すのもいいでしょうね」

そのとたんに高級将校の顔色が変わった。

「分かった。分かった。もういいよ。何をどのくらい欲しいのか言ってみなさい。」と将校が言ってきたので、私は、米二十俵と、女子一人につき千円、つまり、二万六千円を要求してみた。結局、この交渉で、ぼくは米二十俵と現金二万円を寮に運ぶことに成功した。

寮に戻ると女子たちは大喜びだったが、中でも一番喜んでくれたのは、女学生たちのリーダーだった谷津久子の母親だった。この母親の夫は新京の警察署長で、署に残り母親だけが娘の撤退に同行してきていた。大変にしつかりした賢夫人なので、ぼくは女学生たちを夫人に託したし、夫人のほうもそのつもりで女学生の世話をしてくれていた。

ぼくは、米俵の一部を残して大部分は寮の床下にかくし、現金の保管は谷津夫人に頼んでから、嫌がる女学生たちを男の子のように丸坊主にした。女子通信手たちは既に成人

なので何事も強制はできなかった。

一通りの段取りをすますと、ぼくは寮を出て、大連の近くの周水子飛行場に赴き、ソ連軍の武装解除を受けた。武装解除後、日本軍の将兵は解放されず、大連対岸の柳樹屯という村にある苦力小屋に収容された。

広大な敷地に、三十棟ほどの小屋が並んでいた。小屋といつても一棟に五、六十名が収容できる大きい建物である。臨時の捕虜収容所として使われたのだった。そこにあちこちから武装解除された日本軍将兵が送りこまれてきた。

一か月半ほどが経った十月一日、千人ずつの部隊に編成された将兵は、苦力小屋を出てどこかに輸送されることになった。引込線には有蓋貨車を多数連ねた長い列車が数日前から入ってきていた。

「いよいよ日本に帰れるぞ」と喜ぶ将兵が多かったが、ぼくにはそんな樂觀はなかった。シベリア送りらしい、というのがぼくの直感だったが、それは口に出せなかった。みな希望をつみ取るような発言は慎まなければならないのだ。

ぼくは、部隊を離れる日を十月一日の移動の早朝に決めた。よく食べに行った村の食堂の主人に頼んで、小舟をもつ中国人を紹介してもらい、その中国人にまず半金の五百円を渡した。一日の早朝まだ薄暗い時間に浜に小舟を待た

せておく。無事に大連港に着けてくれたら残りの五百円を渡す取り決めをした。

千円は当時の中国人には何年も暮らせる大金なので、その老中国人は「好、好」と喜んで必ず約束を果たすと誓ってくれた。

塚田大尉だけは、ぼくが唯一人で部隊を離れるのを心配してくれた。

「棚橋少尉、一緒に日本に帰ろうぜ。見ず知らずの支那大陸で軍を離れて一人になったら、とても生きては日本に帰れんぞ。飢えて死ぬのが落ちだと思ふよ」と、ぼくを引き止めようとした。

ぼくは塚田大尉の思いやりに感謝はしたものの、決心を変えるつもりは全くなかった。大連に渡って、やるべきことをやった後でないと、自分のことなど考えられなかった。

部隊の移動の朝、まだ薄暗いうちに抜け出したぼくは、老中国人と小舟がぼくを待っていてくれることを祈りながら浜に出た。もし、あの中国人が約束を守ってくれなかったらぼくはまったく違う運命を辿らなければならぬのだ。

しかし、まだ薄暗い浜に老中国人と小舟を見て歓喜した。七分通りぼくの脱走計画は成功だと思った。大連港に近づいた時は、朝はすっかり明るくなり、海がきらきらと輝き

はじめた。

港に近づくと、ソ連兵がボートを駆って、出入りする船の検問をしているのが見えた。まずい！ぼくは感じた。やっとここまで来て日本兵だったことが露見すれば、拿捕されてしまうだろう。老中国人もそれに気づいたらしく、ぼくに言葉を発するなといった。これが成功し、ソ連兵に気付かれることなく検問を通過できた。

港に上がり、残りの五百円を渡されて、喜々として帰っていく中国人を見送ってから歩き出したぼくは、はっとして足を止めた。

今度は、四、五人の中国兵が港の出入口をかためて通行人の検問をしているのではないか。彼等は八路军と呼ばれる共産軍の兵士であることはすぐわかった。

彼等の前を通り過ぎようとするぼくを、まだ若い少年兵が「待ちなさい」と綺麗な日本語で止めた。彼が少年であるのと、ぼくが言葉を発しないのに日本人と見抜いた眼力にぼくは観念した。

「こちらに来なさい。ちよつと調べることがある」と言っただけは検閲所の建物にぼくを入らせた。中には年配の兵隊が三名ほど休憩している様子だった。

「どこからきたのか？」少年兵がたずねた。
「柳樹屯から来ました」とぼくは答えた。

「柳樹屯では何をしていたか？」

「伯父の果樹園があつて、そこで働いていました」

「これからどこへ、何しに行くか」

「大連です。働く仕事を探しに来ました」

「果樹園はやめたのか」

「はい、やめました。日本兵が何千人も来て、果樹園が荒らされるので、伯父もやめました」

「そうか、わかつた。では荷物を調べさせてもらう」

敷布で作った軽便リュックサックを肩から下ろすと、少年兵はリュックの口を開いた。中から数枚の下着類に軍隊毛布、それに軍用双眼鏡が現れた。これを見た少年兵は一瞬表情を引きしめた。

「これは何だ。日本軍のものだな。お前は兵隊だったのか？」

「これは、初めのころ柳樹屯の日本兵が果物の代金に無理に置いていったものです。給料の代りにこれを伯父から貰いました。毛布と双眼鏡は売って金にします」

ぼくは、うまい言い訳だと思った。これを考えて予めわざと毛布を入れて置いたのだった。本物の兵隊あがりだったら、すぐ軍にいたとわかるものを持ってはいないはずだ。「よろしい、わかつた。通りなさい。でも、双眼鏡は没収するけど、いいな」といった。

「いいです」ぼくはほっとする気持ちで答えた。

聖徳寮に行くとき女学生たちは、嬉し涙でぼくを迎えてくれた。女学生の数も収容時からすると数名減っていたが、タイピストの仲本久子は別として、女子通信手は皆寮を出ていつていた。

谷津久子の母親の説明によると、満鉄の乗務員たちのお蔭で各地に散った女学生の父兄との連絡がとれたので、迎えに来られた女学生やこちらから機関車の釜炊のようにしてこっそり親許に送り返したりしているとのことであった。

ぼくはそれを聞いて、心が軽くなった。女学生を親許に戻すことのためだけで、軍を離れてきたのだから…。

日本人のものは手当り次第に何もかも没収された。会社も鉄道も船舶も個人財産も目ぼしい物は没収された。しかし、鉄道の機関手や乗務員たちは日本人が依然として仕事を続けさせられていた。それが幸いだった。

※筆者は故人で、掲載した体験談は、紙面の都合上、ご遺族の承諾のもと、原稿の一部を抜粋しました。

二十五 大連、青島での出来事について

吉祥寺南町

内山 うちやま

満榮 みつえ

生い立ちについて

私は、大正11年、大連生まれです。姉、兄、妹、弟がいました。父が満鉄（*1）に勤めていましたが、勉強するために会社を辞めて退職金を貰い、昼は逋信省に通いながら、夜学に通ったそうです。父はそろばん大会などで、金時計を賞品としていただき、娘が嫁に行くときあげるのにいいなと取っておいてくれました。実際、私が結婚する時、記念にいただきました。

父が逋信局で勉強しているときに私が生まれたので、母が、あなたが一番、家の中で勉強ができるって、褒められていました。私は、女学校では1年から5年生まで、級長と副級長をやっていました。

私が女学校へ入ったころは、大連の人口が増えているときでしたので、私達の代から1クラス増えました。満州国を建てるためです。私は名前が「満榮」といい満州が栄えるようにと父がつけてくれたそうです。父は、満州国ができると思っていました。私たち国民も悪いことをしているとは知らなかったのでしょう。中国は、広大

な土地があるから放ってあるので、日本人が行って開拓してできたんだから、借りればよかったのにと思います。女学校のお友達のお父様が軍人さんで、満鉄から頼まれて盧溝橋事件（*2）を起こしたそうです。それがうまくいったら、満鉄の理事にしてあげるといいう約束だったみたいで、最終的に満鉄の理事になっていました。

結婚したところについて

主人は、朝鮮銀行に勤めており、満州連銀外来局という大きい組織ができたとき、そこに派遣されました。そこで、青島の社宅に入居することになりましたが、社宅の周りでご飯を頂くところがなかったそうので、早くお嫁さんをもらわないとしょうがないっていうことになったようです。知り合いのおばさまを通じて、簡単な写真を送り、一応写真は見たらしいですが、おばさまが推薦する方だったらもうすぐオーケーしますっていうことだったようです。

昭和18年5月に20歳で結婚しました。主人は、母親の生活費をずっと送っていたので、義兄のお嫁さんが大連の方に行った方が物があるから行きなさいということで、結婚式の前の日に主人の母親の荷物が届きました。母親が来ることを私共は知りませんでした。青島に渡るには

渡支証明がいるのですが、私は結婚するので、もう証明は先に頂いていましたが、姑の証明がないので、証明が送られてくるまで、主人は先に青島へ帰り、実家で姑と待つていました。姑と実家での新婚生活です。当時は、新婚旅行などはできなかつたので、実母は新婚旅行ができるよと喜んでくれていたのにできませんでした。

結婚前に料理教室に行きましたが、配給が無くなり二日で止めました。じゃがいもの皮を包丁でむくのはもつたないから、刃でない方でこぞぎなさいと習いました。

主人の出征と戦争体験

主人に昭和19年の元旦に赤紙が来しました。しかし2月11日が召集でそれまで時間があったので、私を親元の大連に連れて帰るからとその証明書を頂いて、私は柳ごうりに自分の着物だけを積みました。主人が出征の時、家はそのままです。出征後は、手紙に番号だけ書かれたものが届きましたが、主人がどこにいるかわかりませんでした。写真が数カ月経ったときに送られてきました。痩せていた人でしたが、顔がふっくらしていました。兵隊さんに行ったら食べ物豊富にあつて、いい物を食べられるのかと思っていました。

引き揚げてから聞いた話ですが、食事は、毎日カボチ

ヤだったそうです。主人は痩せて細かったから、兵隊の仕事ができず、多分特務機関の仕事に回されたと思います。でも入ったときから、仕事がなかつたそうです。スパイする材料がない。それで、上官が、あなたが自害させられるのは可哀そうだから、一般人として洋服を着て早く帰れと言われたそうです。上官も、自分は前から仕事をしているので、自害しろと言われても仕方がない。だけど、君は子供もいるし気の毒だと思ってくださったようです。

戦後は、特務機関や憲兵として仕事をしていた人は、それだけで戦犯とされる時代でしたから、帰って来てバレたらいけないかつたので、これらの話は、主人からはずいぶんあとになって聞いたことです。命は助かりましたが、勤務歴がないことになるので、我が家は恩給がもらえませんでした。元勤めていたところも、朝鮮銀行だったので、会社の年金ももらえない状況でした。

終戦後、大連に戻った後の暮らし

終戦前にロシアが攻めてくるとの話しもあつたそうですが、大連にはそのような話しはありませんでした。

ロシア人が入ってくると、畳を上げて床下を切つて、そしてその下にゴザをひいて女だけがそこに入れるように

しました。またもとに戻して蚊帳を吊ってその上に布団をひいて、弟と父が寝るのです。外には人が順番に立って、お鍋をたいたいてみんなに知らせてくれます。ご主人が出征しているうちの奥さんは頭を刈って男になり身を守りました。

ロシア兵は、玄関のドアを蹴り開けて、土足で家の中に入って来ました。「チャースイ」と言って、腕時計を指すのです。腕に4つも5つもはめていました。昔はねじを巻かないと時計が動かなくなるので壊れたと思ったようですが、捨てるにはもったいないので新しい時計をほしがるのです。うちは、父が小柄で、洋服の戸棚を開けて見ても丈が短く使えないため、パーンと放ってしまふのです。それを私は床下で聞いていました。腕時計のことも知らないような下級の兵士だったようです。

引き揚げについて

引き揚げは、食べられない人が優先でした。また順番を融通し合ったりしています。うちは父がいてくれましたので、後の方に回されました。貯めたお金を行李（*3）の脇のところに隠します。隠しておかないと、ロシア兵が調べる時に全部ひっくり返して取られてしまいました。こういう時のためにちよつとしたお金を持ってお

いて、サツと渡せばいいのよと前の人から話を聞いていました。

引き揚げの途中では大変なことがたくさんありました。途中、ノミやシラミよけのために頭から白い粉（DDT）をふりかけられました。私のお友達は汽車の中で、お子さんを生んで、お子さんが亡くなった方もいます。その後、子供が亡くなったから、もう要らないと離婚させられて実家に帰ったと聞きました。

汽車も時々止まります。でもお金を渡さないと動き出しません。汽車が止まったままだと襲われる可能性があるるのでみんな必死でした。

引き揚げ船に乗り、門司港に着いたとき、私は主人が帰っているか不明でしたので、引き揚げた人の名前が書いてあるボードを見て歩きましたが主人の名前はありませんでした。

引き揚げ後

実家にやつと戻ると、父の4番目のお母さんが「ショウゴさんって、満榮さんの旦那さんでしょ？」と言うのです。ショウゴさんがうちに来て、砂糖とお米をくれたと言うのです。私がいなかったもので、一晩泊まって帰ったと言っていました。ここで、門司では見つけられなか

ったのですが、主人が引き揚げで来ていることを知りました。主人の本籍のあるところに手紙を出して、主人を探して欲しいと伝えました。1、2か月ほどして返事があり、主人の兄のところを下宿していたことが分かり、「直ぐには行かれないが、待っていてくれ」と言われました。しばらくしたら主人が来ましたが、「まだ家も就職も決まっていないので、連れて帰れない。しばらく待っていてください。」と言われました。私の父にも私と子どもをしばらく預かってほしいと頼んでいました。

その後主人は、昭和24年に大和銀行に就職しました。

一番大変だったこと

子どもが小さいときは、主人が兵隊に行っており、帰ってくるか帰ってこないかが心配でお乳があまり出ませませんでした。父が汽車に乗って田舎に行くと、中国人がお米を作っているのので、それを買ってきて重湯を作ってくれました。お乳は少し足りなくても体重があるので、医者さんが配給の牛乳をあまりくれませんでした。少しもらった牛乳と重湯を足したものを飲ませたので、割と丈夫に育ってくれたのですが、その時が一番大変でした。また、大連でも1回空襲があり、キラツ、キラツと銀色の飛行機が光って、うちの上をブーンという音をたて

通っていきました。まあ落とさないだろうと思いつつながら娘を押し入れの下に入れました。そのときは埠頭に落としたりと後日聞きました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

*1 南満州鉄道株式会社（みなまんとしゅうてつどう、通称 満鉄）

日露戦争後の一九〇六（明治39）年に設立され、一九四五（昭和20）年まで満州国に存在した日本の特殊会社

*2 盧溝橋事件（ろこうきょうじけん）

一九三七（昭和12）年7月7日に北京西南方向の盧溝橋で起きた日本軍と中国国民革命軍第二十九軍との衝突事件であり、この事件は支那事変（日中戦争）の直接の導火線となった。

*3 行李（こうり）

竹や柳、籐などを編んでつくられた蓋付きの箱で、主に衣類の収納や旅行用の荷物入れに用いられた道具

二十六 軍隊での経験

境南町

齊藤 與太郎

私は、大正12年生まれで、山形県の米沢市近くの赤湯出身です。昭和14年に満鉄（満州鉄道）の入社試験を受け入社しました。この当時、林口（りんこう）というところに派遣になり、そこで、日本人開拓団の村を見る機会がありました。

当時、土地を開墾すれば全部もらえるという話で日本から開墾にやってきたのですが、あんな荒野を開墾しても、食物を栽培することができるとかと思えるような所でした。開拓団というのは、荒野などへ行くことが多かったようですが、生活は悲惨なものだったと思います。

軍隊での出来事と引き揚げまでについて

昭和19年に初年兵として、入隊してソビエトの国境の綏芬河（すいふんが）というところに配置されました。軍隊というのは、とても厳しいところですが、憧れて行く人もいましたが、初年兵の扱いはひどいものでした。朝から晩まで殴られるし、お腹いっぱい食べられない。だから、残飯なども食べました。食べることも競争です。

私は、兄から軍隊での生活を教わりました。お金に不由するからふんどしの紐に札を縫い付けておくように言われました。

私が配置されていた場所は、水がなかったため、風呂にはほとんど入れませんでした。風呂に入れば、その間にお金などを盗まれてしまうので、気を付けていました。

私は、満鉄で働いていたころ、奉天のロシア語学校で、ロシア語を少し習っていました。入隊後しばらくして、新京の憲兵学校に入り、卒業後は凶們（ともん）の憲兵分隊に配属となりました。凶們は今の中国と北朝鮮の国境近くにあります。

その後、間島（かんとう）特務機関（*1）に勤めました。我々のような若い連中は、もしソ連が攻めてきた時は、今の北朝鮮にある白頭山（はくとうさん）に立て籠もり、ソ連と決戦してやろうといきり立っていました。隊長はそういうことはするなとその動きを制止しました。

ある日、私の上官である小野曹長が「齊藤、おまえはロシア語もシナ語もできるから一緒に逃げよう。」と言いました。特務勤務の者は、軍服ではなく私服勤務だったので、私は、小野曹長と奥さん、子どもと一緒に飛行

場から逃げ出しました。奥さんも男のように坊主にして逃げましたが、吉林（きつりん）の駅で私は八路軍（*2）に捕まり、そこで小野曹長と離ればなれになってしまいました。

私は、八路軍に連行されましたが、吉林の駅前は避難民でごちゃごちゃしていました。それで私は人ごみに紛れ込み、バーツと逃げました。逃げたら八路軍も銃殺するつもりだったのか、ババーンと発砲する音がしました。そこへ、偶然にも駅に列車が来たので、私は、改札で係員に持っていた腕時計をそつと渡して列車に乗りました。列車の中では、八路軍やロシア人が物を奪い取るため歩き回っていました。私のように何も持っていない人は、列車から突き落とされてしまうので、私は、列車の速度が遅くなった時、進行方向に走っていき飛び降りました。また、列車の最後尾から飛び乗ればいいと思っていました。

入隊前まで勤めていた瓦房店（がぼうてん）の駐在所までたどり着けばどうにかなると思いい、そこまで逃げてきた時、私の後を付けてきている人に気づきました。列車の中で私の隣に座っていた人で、男性の恰好（かつこう）はしています。年のころは25歳くらい、明らかな女性です。手を合わせ、私を拝むような様子でした。運

よく顔見知りの助役さんに会えたので、この女性を休ませてほしいと頼みました。彼女は疲労困憊（こんぱい）で、職員が食事を差し出すと、数日間、何も食べていなかったのでしょうか、涙を流しながら食べていました。着替えることができなかったのか、服にはシラミがびっしりについており、上着を脱ぐとパラパラと落ちてきました。彼女の衰弱しきった体からシラミが血を吸っている光景は忘れられません。その後、彼女がどうなったかは分かりません。こういう人が中国人の妻になったのか、野たれ死んでしまったのかと思うとむごい話だと思いません。

きょうだいのこと

私の姉婿（むこ）、妹婿、弟はみんな戦争で死んでしまいました。姉婿は、満鉄で事務員をしていましたが、戦争末期は事務員も招集されたため、昭和19年の台湾沖で戦死しました。しかし3人は、戦死でしたから、まだ諦めもつきませんが、むごいのはもうひとりの妹婿です。

私は昭和21年に引き揚げてきましたが、妹はそのあとでした。てつきり妹婿の実家である愛媛県へ行っていると思いましたが、実際はそうではなく、妹婿は亡くなったとのことでした。

終戦後は、警察官や憲兵だった者は、死刑にされたり、殺されたりしました。私も特務機関の憲兵だったので、逃げていなければ銃殺です。そのような時代でした。妹婿は、大連の元警察官でした。満州の奥地から命からがら逃げてきた見ず知らずの若者の世話をしていました。

その若者が自分と同郷ということが分かり、親しくなつたようです。遠い国にいと同郷というだけで親しみがわきます。親密になるにつれ、自分が元警察官だったことをつい話してしまったのです。元警察官ということをも告すればお金が貰えたので、その若者はお金ほしさに中国人に訴えたところ、妹婿はさんざん叩かれたあげく、殺されてしまいました。引き揚げ船に乗る間際のことだそうです。焼いて骨を持って行くこともできず、爪などを持って引き揚げてきたそうです。

私の弟は、終戦の年の四月に十八歳で現役入隊し出征しましたが、戦地で行方不明となり、その年の八月二十日に戦死にされました。

戦争で自分の肉親を亡くしたことが、一番辛かったです。

引き揚げ後のこと

私は憲兵隊だったので、本来であれば公職追放で仕事

につけませんでしたので、そのことを隠して公務員となりました。今だからこのようなことが言えますが、当時はもちろん言えないので、軍隊には行かなかったことにして就職しました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。

* 1 特務機関（とくむきかん）

特務機関は、旧日本軍の特殊軍事組織をいい、諜報・宣撫工作・対反乱作戦などを占領地域や作戦地域で行っていた。

* 2 八路军（はちろぐん）

八路军とは、日中戦争時に華北方面で活動した中国共産党軍（紅軍）の通称である。現在の中国人民解放軍の前身のひとつ

二十七 満州からシベリアへ

青春時代の戦争体験

吉祥寺本町

大寺 正光

戦後、六十七年を経た今、当時十八歳から四年間の青春の思い出体験を残しておきます。

「就職で渡満から現役兵入隊」

昭和一八年一月に繰り上げ卒業で満州国へ渡り、関東軍の軍属雇員として就職（旧新京市）しました。四月には牡丹江支廠へ転勤し、軍馬防疫の業務を担当しました。昭和二十年に繰り上げ徴兵され、現役入営は吉林市郊外の機動連隊歩兵砲中隊へ陸軍二等兵として五月二十日入隊し、北の守り関東軍として初年兵教育を受けました。八月九日未明に突如の爆撃音と同時に部隊内に非常呼集があり、「完全武装で兵舎前に集合」の命令がありました。

「ソ連対日参戦の宣言」

ソ満国境でソ連軍が侵攻してきたため、連隊は国境の国道守備のため、兵器、糧秣（食糧）、軍馬などを貨車



新京第100部隊（新京市にて）
（三列目左から二人目が大寺氏）

に積み込み出発しました。途中、山中に陣営をし対戦準備をしているとソ連機がビラを投下してきました。連隊は更に前進し夜間の行動中、ソ連軍の大型重戦車が先導し侵攻してきました。抗戦しましたが守り得ず、北辺国境の守りの主要部隊は、南方戦線へ移動しました。留守隊は、抗戦能力が減少しており十分な戦闘が不可能な状況でした。

交戦後退途中、「重大放送」の連絡が部隊に入りまし

「玉音放送、武装解除、強制連行」

「日本軍は停戦し元隊へ帰る。」との隊長命令がありました。満鉄の運転手は不在で、兵士の運転経験者の運転で吉林駅へ到着しましたが、市街地では満州国軍の暴動騒ぎが起きていました。

帰隊直後、ソ連兵により武装解除され、兵士の監視の下、近郊の飛行場へ二日がかりで各部隊員が終結しましたが、そこでは、開拓団の婦女子が格納庫内に収容されていました。

各地から集まった兵隊を混合させ、約一千名の集団ごとに編成し満鉄駅で汽車に乗せられました。私たちには、「日本ヘダモイ」(*1)としか伝えられていませんでした。途中、ハルピン駅で下車し、ソ連製の赤塗の汽車に乗り換えソ満国境へと向かいました。当時、この路線のみが通行可能ということでそのままシベリア鉄道へと入っていきました。私たちは、汽車は東へ向かって走るものと信じていましたが、後方から朝日が昇ってくるのが見えたので、我々は西へ向かって走っていることが分かりました。

自分たちは、ソ連の化学兵器の実験台に利用されるか、重労働を課せられるかでダモイはないという噂があり、数日間、兵隊たちは皆消沈していました。車内の食事も

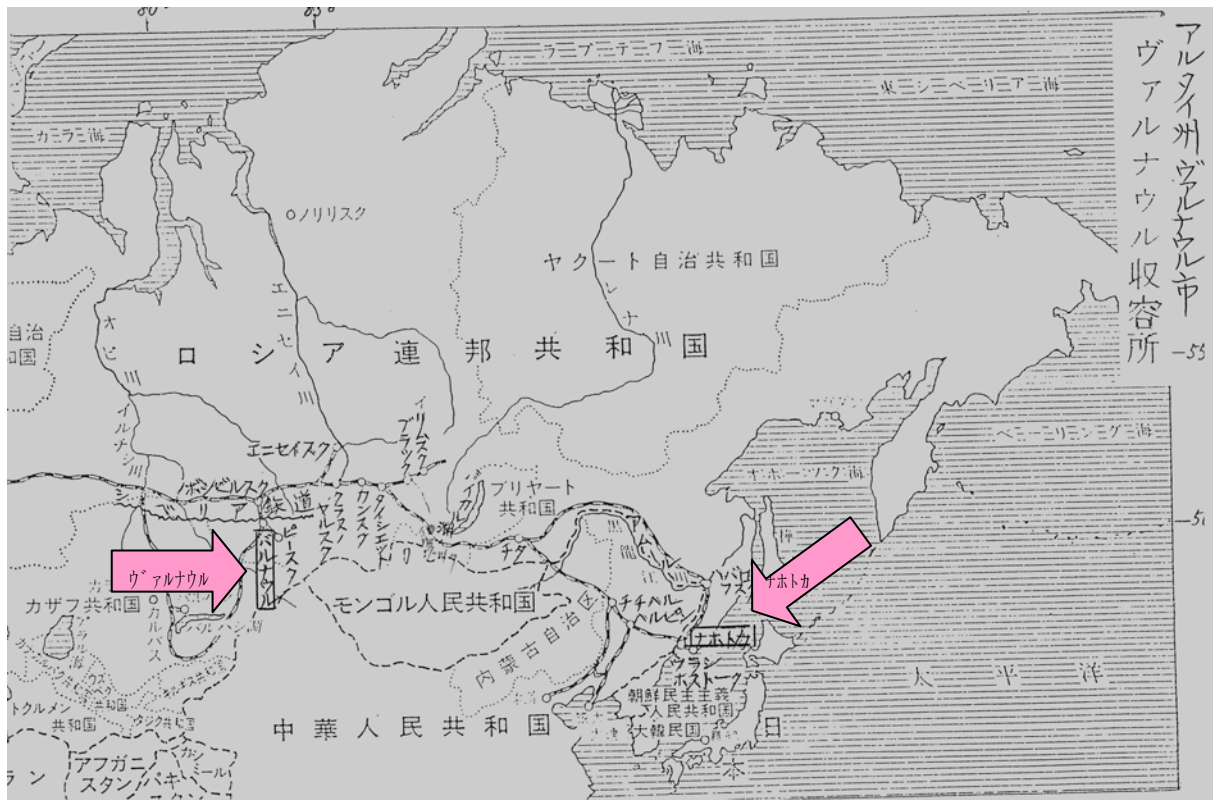
一日一回の飯盒炊事でも半煮えのものもあり、それを途中のわずかな停車時間内で食べていました。

数日後の朝、誰かが「海が見える」と叫びました。そんな馬鹿なことはないと車窓から外を見ると確かに「海」が見えました。汽車が止まった時、すぐに飛び降りて水面に顔を入れて水質を確かめました。この「海」と思っていたのが「バイカル湖」だったのです。半日以上も湖畔を走っていたので、てっきり「海」と思っていました。

一週間以上本線を走り続けた後、南下を始めて、「バルナウル」という駅で下車しました。そこは、工業都市で、我々はそのまま収容所へ連れていかれました。



大寺氏本人（牡丹江第 141 部隊、
軍畜慰霊碑跡にて）



矢印の場所がヴァルナウルとナホトカ

「収容所での強制重労働」

収容所では、日々ことあるごとに人員点呼が行われていました。初冬を迎え郊外での労働により凍傷者が続出し足の指を失う人がでました。急きよ我々に防寒着が支給されましたが、シベリアの寒さは本当に身に凍みました。厳寒、重労働、飢えによる病魔の苦しきから、倒れていく同胞たちも少なくありませんでした。強制労働は、三交代制で夜間の郊外作業やノルマの判定もありました。夜間の郊外作業の帰り道は、歩行が困難なほど皆疲れ切っていました。

収容所の室内は、二段式ベットで毛布一枚のみで寒さを防ぐ努力の毎日でした。また、夜は南京虫が襲い、シラムが衣服に住み着いている状態でした。

毎日の食料も満州から持参したモロコシのスープと黒パン一片だけでいつも空腹の状態が続いていました。あまりの空腹で作業帰りに道端の雑草を持ち帰り茹でて食べることもたびたびでしたが、間違った野草を食べた影響で脳神経に異常をきたす者が出たため、野草等は一切持ち帰り禁止となりました。入浴も月に一回ほどでしたが、サウナ式のお風呂でした。飲み水や紙などが不足している生活はとても大変で、何よりも自由がないのが捕虜生活でした。

二年経過したある時期、収容所内の規律に変化が現れ始めました。

「シベリア民主運動が始まる」

強制連行された後も陸軍当時の階級が守られていたが、突然、民主運動の徹底が図られ、これまでの階級が廃止され、兵士の中から収容所隊長が任命されました。さらに同時期に「日本新聞」が配布され、軍国主義や共產主義等の記事が掲載されていました。

また、数回にわたり個人面接が行われ、生家のことや学歴、資産などの状況調査が実施されました。その面接の目的が何かは後で判明しました。

「祖国への引き揚げが始まる」

昭和二十二年にソ連領内の抑留者を祖国へ「ダモイ」。いよいよ帰国開始となり、三月末に全員が荷物を持参し広場に集合しました。その集団の中から、数十名が呼び出され収容所外へ連行されました。連行された同胞たちは、数年後に復員したようです。

我々一行は、準備された汽車に乗り、復路シベリア鉄道を東へ向かいました。広大なシベリア台地を眺めること一週間ほどで日本海側の港町、ナホトカに到着しまし

た。このナホトカ港こそ日本へ帰国するための乗船地であったので、各地から来た引き揚げ者たちがたくさんいました。現地の引き揚げ者収容施設が満杯であったため、我々は仕方なく近くの海岸で天幕生活を送りました。

引き揚げ船は、三日に一度、三千名ほどを乗船させ日本へ向かいました。我々は、乗船待ちのため数日間が経過していましたが、その間も、次々と帰国列車がナホトカに到着していました。施設がいつばいで収容不可能のため返送組もあつたほどです。

また、復員専用の収容所こそが、民主運動の成果の徹底場所であったため、三段階のチェックを通過したあとに乗船となりました。その際、反動分子は帰国組から抜き出されてしまうので、帰国ができる喜びの裏に不安と恐怖があつたのは確かでした。

「祖国上陸、復員、帰郷」

私は、六月十二日に無事に乗船しナホトカを出港しました。船内では、復員手続後、日本食を久しぶりに味わい、皆で昔の唄を合唱するなどして過ごしました。

同月十五日の朝、甲板上から久しぶりに日本の陸地を眺めながら、一時は「ダモイ」が不可能と思つたこともありましたが、今祖国に上陸することができ喜びは皆

同じであつたと思います。

上陸後は、引揚援護局の施設で全員が消毒され、入浴後に一人ずつ復員業務の質問がありました。夕食時には、皆で少量の日本酒で乾杯もしました。

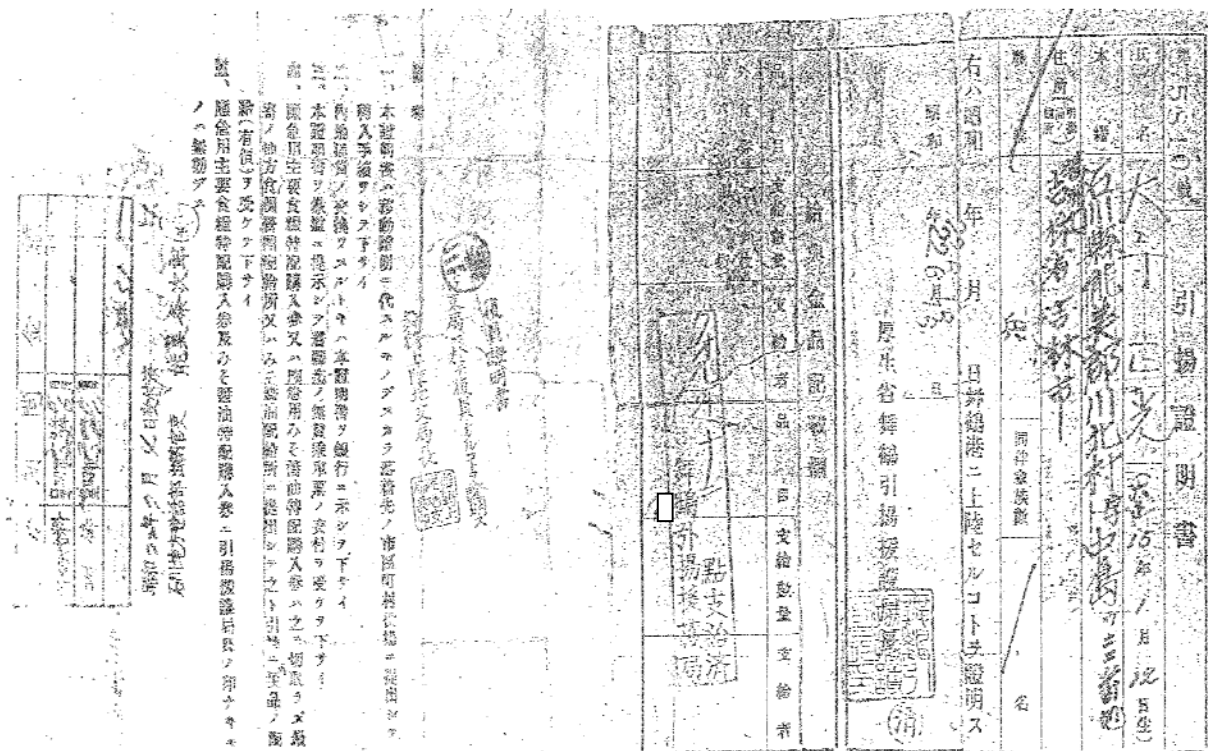
翌十六日には、それぞれの故郷へ帰郷し、「さようなら、元気でね。」という言葉で別れました。帰途、舞鶴駅頭で老婦人が写真を胸にして「どなたか知りませんか。」と尋ねていたのが印象に残っています。

戦中の職場や初年度教育中の戦闘体験、停戦後の強制収容、粗食と凍りつく厳寒での重労働、体力減退による病魔と闘いながらも、幸い帰還することができましたが、在ソ中に母が亡くなっていました。

同胞や戦友の死には弔いをしています。時経を回想して青春の体験記とします。戦後六十七年、改めて平和の尊さを身をもって感じ、次の世代まで平和が続くことを願っています。

*1 ダモイ

「帰国・帰還」の意味で、第二次大戦後、ソ連に抑留された日本人が帰国の合言葉として用いた言葉



引揚証明書

二十八 預言者の受難 フェニックス ―広島―

吉祥寺北町

梅岡 うめおか

功 いさお

このところ、毎年八月六日に広島へ帰って慰霊祭に出席している。青空の下、平和公園の広場は全国各地から、いや世界各国から大勢の人々が集まって来る。

周辺の樹々は緑色濃く、六十年前、この場所が一瞬の光で火の海と化し、街も人も焼き尽くされたことなど知らぬ気に、美しく整頓されている。

ピカッと光った朝八時十五分を記念して一斉にファンファーレが鳴り響き、小泉前首相（当時首相）の気の無い式辞のあと何人かの朗読があり、献花に続いて何十羽もの鳩が放たれて式は終わる。多くの若人が参列していることはよいとしても、戦前からこの場所を知っている人はもはや少数派になりつつある。

ここ平和公園一帯は、昔の中島元町で市の中心部、いわば被爆の直下地に位置している。

七十歳を超えた今の自分にとってこの場所は戦前から戦後、そして現在と折々の記憶が何層にも重なって見えて来るのだ。

小さい時、親と一緒にこの辺りの芝居小屋で見た楽しか

った芝居のこと、川向うの緑の丸屋根が美しかった産業奨励館（現在の原爆ドーム）のらせん階段を登ったことなどがかすかに思い出される。

そして小学校四年の時の被爆。

自宅は郊外寄りの古江という所にあった。あの光の瞬間は、学校の教室におり、慌てて机の下にもぐってゴーツという物凄い地鳴りのような音を聞いた。爆風で窓ガラスが粉々になってふっ飛び、みんな悲鳴を上げて震えていた。そしてやっとの思いで裏山の防空壕へ避難した。暫くじっとしていたあと、這い出して帰る途中で黒い雨が降ってきた。新型爆弾が落とされたことなど知る由もなく、何が何だか分からないまま家へ帰った。家は屋根が崩れ、どこもかしこもガラスの破片だらけで、手がつけれられない状態になっていた。そのあとがまた大変で、町から逃げて来た人々は衣服が黒焦げ、顔も身体もやけどで息も絶えだえ、力尽きて倒れる人、助けを求める人達で見ても無残な有様だった。

学校は死体置き場同然となった。死体は毎日校庭で焼かれ茶毘に付された。臭い煙が我が家まで漂って来て、「あ、今日焼いている」、「今日も焼いている」という日々が何日も続いた。とにかく十歳の子供がいやというほど人の死を間近に見せつけられたのだ。これが戦争の現実というもの

なのである。

終戦後の二学期から近くの寺や集会場に分かれて授業が始まった。机も椅子もない板の間に座っての授業は勉強なんてものではなく、何を教わったのかは全く思い出せない。翌小学校五年になってやっと元の校舎へ戻れた。そんな時、なぜか学校から写生のためにこの中島地区へ来て焼跡を描いた記憶がある。そしてこの場所は高校を卒業するまで整地されることもなく放置されたままだった。

戦後の復興に金と時間を要した事情を考えれば無理からぬことではあるが、焼跡にいち早くこの公園と百メートル道路の地所を確保した都市計画は、今にして思えば先見の明があったといえよう。昭和二十九年の上京後、時々帰省してこの地を歩いての記憶を辿れば、その都度樹木が少しずつ植えられ、公園の体裁が整いだし、百メートル道路もかたち造られて、原爆資料館も建ち、樹々も大きく育って現在に至る、という訳だ。

戦前の静かで穏やかだった家並みの町から一転、死の廃墟となり果て、またまた全然別の新しい顔に生まれ変わった広島。その変遷を見守って来たのが被爆者なのである。

ただ一つ気になることは、原爆慰霊碑に刻まれた「安らかにお眠り下さい。あやまちは繰り返しませんから」の文言である。

そうだろうか？

本当に繰り返されないであろうか？

今、世界の情勢は緊迫しつつある。我々被爆者が死に絶える二十年后、三十年後に誰が核兵器反対を唱えてくれるだろう。あの恐ろしさが忘れ去られた頃、愚かな人類は「それを繰り返さない」と誰が断言できようか。

或る人が言った。被爆者は預言者だと。身を以って受難し犠牲になって今なお、後遺症に苦しむ被爆者の声を後々の人達に伝えてほしい。

核兵器絶対反対と世界恒久平和を。

※この文章は、武蔵野けやき会編「武蔵野から平和を世界にとどけよう」（平成二〇年）から、ご本人の許可を得て転載しました。

二十九 愛する人を失わないために

吉祥寺北町

柴田 しばた

フミノ

三度目の被爆者をださない。非核三原則を願いながら。あの戦争でどれほど多くの若い命を絶たれてしまったことか。やりたいこともたくさんあったでしょうに、夢も希望もたくさんあったはず、食欲旺盛な時代に食べる物も十分に与えられずに。

「撃ちてし止まむ、米英駆逐」と言わされて、自分で自分を納得させながら「お国の為天皇陛下の為」と銃後の女性として凜凜しく生きることを教えられてきました。

私は挺身隊の一員としてちょうど十カ月の間、船舶司令部に勤務していました。私の配属された所は庶務課でそこは佐官級の方、下士官、それに地方から招集で来た方達が大勢でした。朝八時に朝礼が始まります。大尉だったか中尉だったか、毎日交代で号令一括全員二列に整列して、先ず東方遙拝（とうほうようはい）に始まり訓示があり、戦陣訓だったか、五ヶ条を皆で大声で声を合わせて、「一ツ、軍人は忠節をつくすを本分とすべし」「一ツ、軍人は礼儀を重んずべし」「一ツ、軍人は上官の命令に従うべし」等と言います。それが終わると女子は竹槍をもって、エイツ、

ヤアーと将校の号令の許に訓練をやらされました。「米兵が上陸した場合は一人が三人の米兵を殺せ」と訓示があり（戦争は人殺しなんです）相手の胸心臓をねらってブスツと差し込み、それをグアツと右へ廻すように教えられました。一瞬でも誰かが手をぬくとすかさず「声が小さい、もう一度。そんな事じゃアメリカ兵は殺せないゾツ」と大声で怒鳴られて、またエイツ、ヤアーと皆でたつぷり十五分はやらされもうクタクタです。

忘れられない、忘れることのできない、あの日も朝から快晴で雲一つない暑い日でした。朝礼の訓示が終わり個々に竹槍をもった途端その時、ピカッドオンと、何だ、何だとすぐ誰かが「防空壕に入れ」と大声で叫び、皆我先にと防空壕に入りました。常に女性を先に入れてから兵隊たちが入るように訓練をしていましたが、まず一番に将校兵隊たちがウワツと入り、私達女子は残されたまま。ふっと空を見上げて驚きました。真つ赤な雲。あれつと、口々に言ってるうちに壕の中から将校がすぐ出て来て、兵舎に駆け込み電話をするけど全く通じません。皆右往左往するばかり。大変なことが起きたとだけ。暫くして市中が火災で全滅だと情報が入り騒然となり、私は声をかけていたのだ庶務の将校と共に我が家を見て来ることになり、兵舎を出て驚き、全く驚きです。半裸状態の男性女性が素足で次

から次と血を流しながら「助けてください」「助けてください」と、何が何だか分からない状態です。御幸橋のところまで来ると、向こうはすっかりつぶれて見渡す限り火の海です。

橋を渡り、すぐ右側に行くと我が家のある平野町では家の近くが燃えている。「どうしよう」。母が心配で、あそこ、あそこといったことだけ覚えていきます。来る人来る人髪は逆立ち、皮膚はペロリとむけて血を流し素足のまま助けを求めている状態。耳がちぎれてぶらさがり顔中血だらけ腕がなくて足元に倒れている男性、目に木が刺さったまま倒れている人、そこへ半狂乱の若いお母さんがリュックを背負ってその上に赤ちゃんを背負い、途中赤ちゃんが泣くので、リュックの下に赤ちゃんを背負っていたと勘違いをして赤ちゃんを火の海の中に捨ててしまったので「どうしよう助けて、助けて」と大声で…。そのお母さんも大火傷で黒い顔に腕の皮膚はむけて素足でした。本当に生地獄です。私達挺身隊は、皆さん焼け出され、ほとんど帰る家のない身内の情報も分からぬ人ばかりで、兵舎の部屋をあてていただき、お風呂にも入れましたし、お食事も十分にいただきました。しかし、夜になっても全く眠れませんでした。翌朝早く将校さんがみえて早目に出掛けました。橋を渡ると死体がゴロゴロ黒こげ炭化状態です。防火用水の中に

水を求めてか用水の中いっぱいにくれている裸の死体。母かしらとのぞくと男性。我が家の方に入ると、またまた死体。男性だか女性だか分かりません。瓦礫の間から炭化した両足がニョキツとのぞいている状態。もう駄目だと思えました。家の前まで来ると門柱が片方だけ残っていましたので、焼けぼっくりの板で私の無事を知らせるべく書き記しておきました。三軒先の中国新聞社社長のお宅のそのそばに一死体。「アッこれ、これ」と言いますと、将校さんがよく見て「これは違うよお腹に赤ちゃんがいるよ」。ああ違っていてよかった…。

それからあちこち市中を人の集まっているところ、比治山の上から向こう側、山に運ばれたかもしれない、とにかく死体を確認しなければと探し廻る毎日です。

六日ぶり十二日の夕方、生きている母と兄にやっと会うことができ、親子で肩を寄せ合って只々涙。生きて会えるとは全く思っていませんでしたので、言葉もなく、ただ手を固くにぎり合って一時を過ごすことが嬉しかったです。兄は右足にひどい傷で歩くことも不自由な状態で、母は顔にガラスの破片がささったまま、義姉は家の下敷で即死、悲しい出来事です。兄は義姉の後を追うように二十日後、出血多量で死去。母は死ぬまで「アメリカが憎い、アメリカが憎い」と言い続けていた事を忘れることができせん。

軍人、政治家の人達は何の物資もない日本がアメリカと戦争をして勝てると思っていたのでしょうか。勝つ自信があつたのでしょうか。私は聞きたい。声を大にして聞きたい。

戦争をすれば尊敬する父を失い、愛する夫を死なせ、可愛い我が子をとられ、恋人をも奪われるのです。

戦争のできる国にしないでください。

生きるということをもっと真剣に考えてほしい。

生きることの許される日まで、与えられた一日一日を大切に、自分の持ち時間を他人や社会のために、微力ながら頑張るつもりです。

平和の鐘を鳴らし続けて平和の祈りをいつまでもと

赤き花眞つ盛りなり広島忌

※この文章は、武蔵野けやき会編「武蔵野から平和を世界にとどけよう」（平成二〇年）の一部を修正したうえで、ご本人の許可を得て掲載しました。